大日本名所圖會

第八十九編

東京近郊名所圖會

第十四卷

東陽堂發行

名所風俗之所

- ○鎌倉名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○雪況圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○香取名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○郵船圖會　全一冊　定價五十錢　郵稅二錢
- ○東本願寺葬式圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○伊豆七島圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○御大喪圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○横濱名所圖會　全一冊　定價三十錢　郵稅一錢
- ○臺灣蕃俗圖會　上　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○成田鐵道名勝誌　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○東京歲事記　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○江島名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢

難福之部

難福之部

- ○小笠原遊覽圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○男鹿島名所圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○東京近郊名所圖會第一ヨリ第十一マデ既刊一冊十五錢　郵稅一錢
- ○米國艦隊歡迎圖會　全一冊　定價廿五錢　郵稅一錢
- ○第三回內國勸業博覽會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○京都大博覽會　全一冊　定價三十錢　郵稅一錢
- ○奠都三十年祭圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○豐公三百年祭圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○慶事集　全一冊　定價三十錢　郵稅二錢
- ○東京勸業博覽會圖會　全五冊　一冊十五錢　郵稅一錢
- ○新年の祝　全一冊　定價四十錢　郵稅二錢
- ○菅原大神千年大祭圖會　全一冊　定價三十錢稅一錢五錢
- ○日蓮聖人第六百五十年紀念大會圖會　全一冊　定價十五錢稅一錢五厘

難之部

- ○第五回內國勸業博覽會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○諏訪名所圖會　全一冊　定價十五錢　郵稅一錢
- ○京都名所圖會　全八冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○明治三十年各地災害圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○岐阜震災起聞　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○臺灣土匪掃攘圖會　上、下　全二冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○三陸海嘯被害錄　上中下　全三冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○大洪水被害錄　上中下　全三冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○明治三十年各地災害圖會　自一編至十編　上、下　全二冊一冊定價二十錢　郵稅一錢
- ○日清戰爭圖會　上中下　全十冊一冊定價十五錢　郵稅一錢
- ○支那戰爭圖會　全三冊一冊定價二十錢　郵稅一錢
- ○西本願寺葬式圖會　全一冊定價二十錢　郵稅一錢五厘

新選東京名所圖會

毎一冊ニ付
定價十五錢郵稅一錢

- ○上野公園　上、下　全二冊
- ○淺草公園　上、中、下　全三冊
- ○芝公園　上、中、下　全三冊
- ○麹町、愛宕、清水谷公園　全一冊
- ○深川公園　全一冊
- ○湯島、根津、白山、王子、高田公園　全一冊
- ○坂本、日比谷、道灌山、飛鳥山、隅田堤　上、中、下　全三冊
- ○東京總說幷內廓之部　全一冊
- ○麹町區　上、中、下、下ノ二　全四冊
- ○神田區　上、中、下、下ノ二、三　全五冊
- ○日本橋區　上、中、下ノ二　全四冊
- ○京橋區　上、中、下　全三冊
- ○芝區　上、中、下　全三冊
- ○麻布區　上、下　全二冊
- ○赤坂區　上、下　全二冊
- ○四谷區　上、下　全二冊
- ○牛込區　上、中、下　全三冊
- ○小石川區　上、中、下ノ、下二　全四冊
- ○本郷區　上、中、下　全三冊
- ○下谷區　上、中、下　全三冊
- ○淺草所川　一、二、三、四、五　全五冊
- ○本所區　一、二、三　全三冊
- ○深川區　一、二、三　全三冊

（完）

發行所　東京新橋東通　東陽堂
神田石町
振替口座本郷一一九番
電話一九〇七〇六番

大日本名所圖會第八十九號

東京近郊名所圖會第十四

◉西郊の部其二

○口　繪

玉川小鮎釣の圖

○挿　繪

千駄ヶ谷八幡宮、同觀音堂、仙善院庭中、龍岩寺庭中、子明神社、駒場野、北澤梁島社池尻祖師堂、豪德寺。

○寫　眞

千駄ヶ谷町役場、仙善院境内の松、古里神社、豪德寺内井伊直弼の墓、同寺首塚碑、聖輪寺、玉川河原の遠望、松陰神社、松陰其他の墓。

◉荏原郡世田ヶ谷村

○下北澤

十字路
八幡神社
森殿寺
淡島堂　鑄灸
松陰神社
吉田松陰其他の墓

○世田ヶ谷

勝國寺
豪德寺
課道師の遺跡
井伊家の墓所
吉良氏の古墳
吉良氏の古城址
菅刈橋　常盤橋
八幡神社

◎松澤村

松原乙女椿の奇實
上北澤の牡丹

◎駒澤村

駒繋神社
西澄寺
三軒茶屋より多摩川に至る沿道の略案内
上馬引澤
宗圓寺

◎玉川村

○用賀

八幡神社
觀音堂
眞福寺

○瀧田

行善寺
同眺望
玉川神社
慈眼寺
二子の渡
多摩川の河原
二子東岸の旅亭
多摩川の香魚
舊家長崎氏

◎千駄ヶ谷町

原宿
龍岩寺　開墾松
慈光寺
長安寺
勢揃坂
田原藤太の山車
原宿停車場
穩田
穩田はもと田圃なり
桃太郎主義の幼稚園
名士の邸宅
穩田橋　飴屋橋
紫の井
源氏山

○千駄ヶ谷

新日暮里　仙善院
お仲團子
千駄ヶ谷停車場
順正寺
聖輪寺　增譽法印墓
新道
瑞圓寺
八幡神社　現況　意況　由來　大祭日と氏子
八幡前の景況
新屋敷
水口の陰榎

◎澁谷町拾遺

松崎鐵堂先生の舊居
服部南郭先生の別業
堀田相模守の舊邸
伊勢野の法如庵
再び金王櫻、鶯塵松に就て
澁谷氏の舊蹟に就て
羽澤の史跡

○豐多摩郡有名の墳墓

玉川小鮎釣の圖

大日本名所圖會第八十九號

山下重民編

東京近郊名所圖會　其十四

◉西郊の部第二

本編は筆を下北澤の八幡神社に起し。森嚴寺淡島堂に詣りて靈灸の事を敍し。若林に憂國の志士吉田松陰を吊ひ世田ヶ谷に入りては勝國寺を經て有名なる豪德寺を訪ひ其の實況を探査し。謙道師の遺蹟井伊家の墓域を歷尋し吉良氏の古墳を探り城址を觀。常磐橋の條に同氏が寵妾の慘事を記し。轉じて松澤村に廻して駒繫神社を拜し。三軒茶屋より更に車を駒澤村に廻して駒繫神社を拜し。三軒茶屋より大山街道を進み。瀨田の行善寺に詣りて其の勝景に對し二子渡頭に杖を駐めて。其の實景は勿論新設の旗亭並に漁魚の狀を記載し。次に新に筆端を千駄谷町に加へ。原宿に圓座松。穩田に紫井の舊蹟を尋ね。仙壽院に新日暮里の光景を追懷し。聖輪寺に增譽法印の墓を吊ひ。八幡神社に詣りて新舊の實況を詳記し。別に澁谷町の拾遺を設け。南郭、慊堂兩先生の舊居より金王櫻、鎭坐松等に就て更に細叙せり。次編には代々木より新宿、中野方面に涉りて紹介すべし。

◎世田ヶ谷村

世田ヶ谷村は荏原郡に屬し。舊菅刈庄に列す。其の位置は上目黑村の西、駒澤村の北に連れり。卽ち池尻、三宿、太子堂若林、下北澤、代田、世田ヶ谷、經堂在家の舊八村を併合したるものに係る。

舊八村中世田ヶ谷の名は特に世に聞え居るを以て直ちに之を冠稱せしものと知らる。吉良治部大輔治家世田ヶ谷鄕を賜るよし吉良家譜に載せたれば。應永の頃は已に其の稱ありしと明かなり。按ずるに世田ヶ谷は瀨田ヶ谷ならむ。近傍に瀨田村あり。此邊より波及せし名にや。幕府時代世田ヶ谷領と唱へしもの三十村に涉る。瀨田は勿論其の內に在り。近江の勢多も亦瀨田ならむか。

世田ヶ谷村の中池尻、三宿、太子堂の舊三村に係る事蹟は記事の都合に因り。之を前編に揭げたり。本編には下北澤以下を載す。看者其の心して讀給はむことを請ふ。

◎下北澤の十字路

駒場路を西に進めば十字路に會す。左の石標あり

東　あをやま
南　ゆうてん寺　めくろみち
北　ほりのうち　よつやみち

卽ち西に直進すれば森嚴寺の淡島堂に至る。左して尙ほ西行すれば。第二衛戍病院の前より太子堂に達するを得べし。此

石標の臺石に「集錢面々家内安全」とあり。實にゲンキンなる書方といふべし。

●八幡神社

八幡神社は十字路より二三丁西に在り。入口に石の鳥居あり享和元酉年九月、七世忠舉代と刻す。八幡宮の舊石額を掲ぐ傍に盥石を置く。文政七年甲申九月大山谷氏子中と彫せり。次に赤色の鳥居あり。石階十三級を登れば又石の鳥居ありて右に神樂殿を設く。四間四方に二間の橋掛りを附す。他の神社のものに比すれば。其の結構大に觀るべし。南楣に「報國」の金字額を懸く。三十七八年戰役の記念なり。更に石階を登る十三級。石獅双置す。嘉永五年八月朔下北澤八幡前とあり社殿は南面し二間に三間にて茅葺素木造り。其の内石壇の上に二重垂木廻欄の小祠を安ず。而して八幡宮の白字額を表し注連繩を張る。支社には靈山稲荷大明神、高良玉垂大明神を祀りぬ。裏口西方には石の鳥居を建つ。

境内丘岡の上下老杉森立。日光を漏さず。喬松五六其の中に挺立し。遠く之を望むを得べし。

神樂殿に面じて三間に二間の空亭あり。觀覽場にや。是も他に見ざる所なり。

もと當社の拜殿に賴朝富士の牧狩を描きたる額ありしよし四方の道草に載す。今は別に拜殿もなく額もなし。

北澤總鎭守八幡宮の社云々。拜殿に當時のものゝ捧げたる額あり。賴朝富士の牧狩繪がく。寶永正德年間のものとみゆ。繪の體其比の一枚繪といふものに同じ。五采剝蝕してはつかに其形像を存するのみなり。

古來一枚繪といふもの今の一枚繪といふものゝ類にあらず金時が稚あそび仁田四郎が猪を仕留朝比奈が島はたりなどあら〳〵しく書て。丹ろくしやう黄わうなど二三色の繪の具をもていろどり墨の上には膠をこくぬりてうるしぬりのやうにみせたるを。西の内紙丸一枚にすりたり。五維組の近得ニ日本畫便面一枚ニ其畫多如ニ鬼畜ニ不レ類ニ人物ニなど書たるは此一枚繪といふものをとりつたへしなるべし。今時のにしき繪と呼時世粧の巧畫を見なば。謝氏も驚嘆すべし

こゝの額の畫其比の町繪師の筆にて。賴朝の先徒の者の眼をむき出し。頰髭さへ短き羽をりに。長き無反の刀指たる體今の世にはめづらし。

想ふに今、戸越八幡神社に掲げあるものと略同じかるべし。當社鎭坐の年次詳かならず。往昔吉良家所領の頃は七澤八八幡とて。其の數の如くありしが。當社も其の一なりと傳ふ。舊別當は森嚴寺なり。

●森嚴寺

森嚴寺は同村二百三十八番地卽ち八幡神社の西鄰に在り。門内南に面して銀杏の大樹二株對立す。大さ三圍。一間餘の處より枝四方に張る。西の樹稍々大なり。東畔に庚申塔四基あり。其の中央のものには延寶二の文字を見る。大なる草鞋を掛け。前に花菖蒲を挿む何人か祈願するものありと知らる。又地藏堂あり。内に石地藏尊を安置す。其の形漫滅僅に存す其の北位に碑あり

諸共にいさまねらなむかきりなき
よを長秋の有明の月　慈正莽月村茂道

背面に「天保十五年歳次甲辰秋九月十有七日辭世壽八十二通稱月村善左衛門」と刻す

佛殿は南に面し。茅葺素木造り。八幡山の白字額を掲け。箱棟には三個の葵章を附す。金色燦然たり。方丈、庫裡相續けり。東都一覽武藏考に。境内に櫻多し。中にも垂枝櫻一樹めつらしき大木なりとあれど。今はなし。

當寺は八幡山と號し。淨光院と稱す。淨土宗にして京都智恩院の末なり。開山は清譽存廓孫公和尙。明暦元年七月二十一日寂す。開基は結城中納言秀康卿なり。

寺傳に云。孫公和尙の師を萬世和尙といひ。越前國一乘院に住職す。秀康卿常に萬世和尙に歸依し給ひしが。慶長十二年四月八日終焉の期に臨み。黄金若干を賜ひ。一寺を造立せむことを委囑す。然るに萬世和尙衰老して其の事を果す能はず因て之を孫公に命ず。孫公師命を承けて遂に當寺を開創せり秀康卿の法號を淨光院殿黄門森嚴道慰運正大居士といふ。乃ち當寺を淨光院森嚴寺と稱すと。

境内七石四升の地は舊地頭齋藤攝津守の寄附せし所。代官支配に歸して後。免除地となり居りしといふ。

〔みほとけの惠はあつきやいと哉〕

●淡島堂

淡島堂は森嚴寺の境内に在り。表門は斜めに道路に面す。丸木柱にて「森嚴寺」の白字大額を表す。門前に常夜燈二基を建つ。内藤新宿上町旅籠屋中と刻す。門には靈灸と大書せし木札を標出す。門内一帶の甃路を通し。石燈籠、石獅子を配置す。堂は東面し。破風素木造り角柱廻欄附にて。鳳龍等の彫あり。觀音扉、格天井なるが。目下修繕中に係る。堂前に鐵製貯水盤あり。森嚴寺九世明譽上人代天保五甲午星六月十三日。石造線香立には文政五壬午年六月七日と彫る。堂には扁額なく。俳句を連書せしものを掲く。其の軸に

青柳のいつまて寂かす道の家　太白堂孤月

とあり。天保三年壬辰の春奉納する所なり。

堂内の柱に「當山より諸勸化不レ出」「おさめばりさいせんばこへ、いること無用」との貼紙あり。

もとは淡島明神社と稱したるも。明治の初年神佛混淆禁止後今の名に改め。僅かに之を境内に留るを得たり。

江戸名所圖會に云。祭神は紀州名草郡加太の淡島明神に同じ相傳ふ當寺開山淸譽上人（紀州名草郡の產なり。故に產土神とす）修行成就の後。當寺を開創せらるゝといへとも。常に

腰痛の患あり。因て年月淡島明神に祈願をこめ奉り。夢中靈示あるを以て灸治し。終に積年の病痾を遁れたりしかば。其報賽として紀州加田淡島明神の神主に告げて。此御神を此地に勸請なし奉り法樂ありしと云。是故に累世の住僧連綿として此灸治の法を口授相傳し。衆病悉除の爲め。毎月三八の日是を施せり。因て灸治を求むる輩は。遠きを厭はずして此地に至る者少からず。但三月十三日、七月十三日、十二月二十八日は休日なり。祭禮は三月十九日と云。」

淡島堂の傍に十王堂あり。閻羅王と不動尊とを安置す。板壁に當堂の建築繪圖を表出す。明治二十一年四月清水長之助とあれば其の頃竣工せしものなるべし。

四方の道草に左の如く見えなれば。こゝに記して彼の灸治のふるくより世に知られたることを證すべし。

北澤淡島社　願心寺（森嚴寺の誤りなり）のうちに鎭坐あり。十年ばかり前に寺も社も自火にて燒たり。本堂は作り出しかと。淡島の社はいまだ事そきたる假の社頭なり。本多氏の由緒あるにや。なへて立葵の紋つけたるもの社頭に見ゆ。本堂の前に大なる銀杏樹二もとあり。數百年の古木たるを見る。寺草創の初うえしにやあらん。この住持其いにしへより淡島の神夢想なりといひて。足の陰經に灸す。大人小兒男女ともみな同じ所に灸するのみにて。諸病に驗あり。二三十年來殊にはやり出て。日々來り灸するもの多く。煩勞に堪へず。依て月の三八の日を灸の定日とし。來る者に一二の番札をあたへ。いくたてにも灸を與ふ。人毎に只三壯のみ。今日も定日なれば參る人八の鐘なる頃までに。既に二百餘人に及といへり。但しこの灸夢想にて自宅に在てみつから灸しては驗なし。必灸する毎にこゝに來りて。灸を請にあらざれば病治せずと云。故にくる人ごとに今日は早かりし。誰々は遲かりしなどかたみにいふ。寺の前に酒飯あきなふ家一戸。この外近くにも猶あり。民家より灸ある日ごとに路次に出茶屋を設く。こゝかしこに在り參る人かなたこなた心任せに憩ふをもて。貧民又少しの錢を得。又淡島の神の利益なさしむる所なるべし。灸するものも月ごとに六たび。はるゞゝの途をあゆみ來るをもて。氣運動し食を消化し。病これによりて自ら癒ぬべし。自宅に灸して驗しなきはこの故にや。賣僧錢を欲するの舉なりとそしる人もあれど。また槩してあしともいふまじきにや。此記事は文政三年季夏なり。

立寄りて仰げば高し松のかげ

●松陰神社（しゅういんじんじゃ）

松陰神社は世田谷村大字若林太夫山（俗に長州山と稱す）に在り。三軒茶屋より十七丁。

南方入口に華崗石の大鳥居を建て。「松陰神社」の石額を掲く明治四十一年十月五十年祭典山口縣出身者相謀建之爲記念の銘あり。次に榊二株。次に高野槇二株を植。東京赤阪青山家內尙志館學生之を捧くと標識す。次に槭一樹あり。若林有志者の獻する所。四尺許の石燈籠には山口縣士族天野虎雄、埼玉縣平民福田忠恕と刻す。社前に達する道路の左右に華崗石の燈籠三十基を列建せり。皆五十年祭當時の施設に係る。社前第一に正二位勳四等公爵毛利元昭第四に正二位大勳位公爵伊藤博文と刻しあるを見る。籠燈の間社の正面に石の鳥居孤立す。明治三十四年十月建る所。其の東畔に「松陰先生五十年記念大會建碑之地。帝國教育會と大書したる木標あり。社は茅葺素木造りにて事務所其の北に接續し。南方別に百數十名を容る休憩所を設く。又大鳥居の南西に寄進の樹を植。石標に「謹供高野槇藝備協會」とあり。銀杏の石標には「景慕英風。植樹表誠。明治四十一年十月二十七日肥後學生と銘せり。其の南方に長方形の運動場あり。

社務所は東北方石階の下北側に設く。

○吉田松陰其他の墓

松陰神社の背後杉林の內に一區域を成し。松陰先生其他の墓を設く。入口に石の鳥居あり。大政一新之歲、木戸大江孝允と銘す。先づゆかしき感を生ず。石路を蹈で進めば墓は松陰先生を中心として左の如く列次せり。

賴三樹三郎
小林民部少輔
吉田寅次郎矩方
來島良藏多々良盛功
福原元之進大江信冬
綿貫次郎助

以上六基石柵內に在り。前に石燈籠四基を配す。回思すれば諸士は明治以前關間苦辛し國事の爲めに斃れ。維新大業の先驅を爲したる者。詣人齊しく襟を正し。恭拜追吊するは素より其の所なり。

東に長藩第四大隊戰死者招魂碑あり。西に來島良藏妻和田春子の墓あり。明治八年乙亥十一月十七日と見ゆ。

入口の西に子爵野村靖、夫人野村花子の墓相並ぶ。子爵の墓背には「明治四十二年一月二十四日薨享年六十八。從遺言葬於松陰先生之側」と鐫し。夫人の墓背には明治四十四年四月十四日歿年六十四と刻す。子爵骨を市內の靑山、谷中に埋めずして。遠く郡部に埋め。且つ其の墓を豐大にせず。識見ありといふべし。

域內中央に盥石あり。明治紀元戊辰冬十二日と彫る。石の鳥居と同時に設けしものにや。

松陰先生は安政六年十月二十七日を以て小塚原に刑死す。初め其の地に葬る。後ち碑を建て遺詠を刻す。幕府之を毀たしむ。文久二年久阪義助等再び碑を建つ。今小塚原回向院の墓地に存する者是なり。同三年正月高杉晉作等相謀り。長州藩

避災の地に改葬す。此墓是なり。
松陰先生の事蹟は世人の已に知る所なり。且つ近來德富蘇峯「吉田松陰」と題する著書中に其の言論行狀を詳述したれば就て看るべし。

◎世田ヶ谷

世田ヶ谷は世田ヶ谷村の大字にして。村名の由て基く所なり往昔吉良家の盛大なりし頃は其の城下町にて今に至るまで上町、下町の名あり。古は毎月一六の日に市を開き。商人の來り集るもの多く。殊に殷賑を極めたりといふ。天正年間北條氏より市の免狀を下せり。左の如し。

掟

一市之日一ヶ月　一日　六日　十一日　十六日　廿一日　廿六日
一押買狼藉堅令二停止一事
一國質鄕質不レ可レ取レ之事
一喧嘩口論令二停止一事
一諸役一切不レ可レ有レ之事
已上

右爲二樂市一定置所如レ件

北條氏虎印

天正六年戊寅九月二十九日　　山角上野介奉之

世田谷新宿

天正十八年以後は漸く衰へ。其の後は毎年一回となり。今に至るまで之を行へり。即ち十二月の歲市にて。當日はいかなる細貨零品にても販賣し盡さゝるはなし。因て俗に世田ヶ谷のボロ市といふ。

當地は寛永元年井伊掃部頭直孝の所領となりしより。歷世之を傳へ以て明治に至れり。

小名　宮の阪（西北の間）　元宿（中央）　久保（北より南をいふ）　竹ノ上（北端）
羽根木（東北隅）　横根山谷（西方）　宇奈根山谷（西隅）
上町（南方）　下町（南方）

●勝國寺

勝國寺は世田谷元宿の高地道路の北に在り。若林なる松陰神社の林を出て西望すれば。畑地を隔て一の高屋を認むべし。是れ當寺なり。即ち松陰神社と豪德寺との中間に當る。門徑の左畔に石地藏あり。享保十七壬子十月設る所。北に入りて茅葺赤色門を建つ。門内正面に本堂。西に藥師堂を構へ醫王殿の藍字額を掲ぐ

當寺は九香山と號し藥師院と稱す。新義眞言宗にして豐多摩郡中野町寶仙寺の末なり。幕府時代は寺領十二石を有せり。開山は詳ならず。中興開山は權大僧都定慶にて。貞享元年正月九日寂す。

相傳ふ。當寺は吉良義高の祈願所なりと。然れども吉良系圖に義高を載せず。因て東都一覽武藏考に。義高は誤なり。左京太夫政忠なり。政忠法號を勝國寺照岳道旭と云。久良蒔田勝國寺も同開基なり。證とすべし。

●豪德寺

豪德寺は世田谷村大字世田谷小名竹の上古城跡の傍に在り。有名なる大刹にて。大谿山と號し洞春院と稱す。曹洞宗にして東京市芝泉岳寺の末なり。

當寺は文明十二年庚子吉良左京太夫政忠其の伯母弘德院殿の爲めに創建せしものにして。直ちに其の法號を采りて寺名とせしものなり。當時馬堂昌譽禪師を以て開山とす。故に濟家の禪刹たり。天正十二年に至り。門庵宗關禪師來りて董席し丹長老の讓りを請て曹洞に改む。是を後の開山とす。門庵は元和七年十一月二十六日寂す。寛永元年彦根藩主正四位上左中將井伊直孝侯世田谷の地を賜り。同十五年三世雪岑和尙の時。當寺の大檀那となり。萬治二年六月二十八日逝去す。乃ち遺言に因り令嗣直澄侯其の遺骸を當寺に葬り。弘德の寺名を改めて豪德とす。直孝侯の法號を采るなり。乃ち是を中興開基と爲す。是に於て侯の賢娘掃雲院殿無源了心禪尼侯の冥福を吊はむが爲めに。許多の淨資を喜捨し。堂宇を經營し。三世佛の木像を安置して。良田數十頃を寄附せりといふ。

寺寶には吉良家系圖一卷、井伊直孝軍配團扇一柄を藏す。

○現況

南方の田間を流るゝ烏山用水に架せる淸涼橋を渡り。北に登れば舊總門の跡に。大谿山豪德寺の石標を建つ。更に進む八十間許表門に達す。素木造にて草字「鸞鳳□」の額を掲ぐ。雄房書と署せり。背面にも「閔婆廟」の墨字額を扁す。「佛敎講論、祖祿提唱、當山」と標示しあり。彼の「不許葷酒入山門」の石標には「當寺叢林開闢十五世靈潭誌焉、維時寛政二龍舍庚戌五月穀旦」と見ゆ。又東畔に天明年間建設せし法華云々と刻せし石碑あり。門内左右槭樹を植。左に明治三十五年九月薨去せられし「忠正公神道碑」と題せし豐碑屹立す。

公諱直憲。姓藤原朝臣。井伊氏。正四位上行近衞權中將兼掃部頭幕府大老直弼朝臣第二子也。

云々と其の事蹟を詳記す。三十八年十二月建る所にして。篆額者等左の如し。

從三位子爵　井伊　直安篆額
從四位　谷　鐵臣謹撰
正五位　日下部東作敬書
井龜泉刻字

正面に佛殿あり。瓦葺素木造りにて總て洞家の制なり。月舟書の「三世佛」の碧字額。二重屋の下に「大谿山」の藍字額を表す。此の大谿山の額はもと表門に掛けたるものにて。此處には月舟書の「選佛場」の額を掛けありしなり。佛殿は七間に六間にて。本尊釋迦、彌勒、彌陀を安す。共に坐像高さ八尺。客殿、庫裏等廊下續きにて其の後に接せり。

佛殿の下に石燈籠二基を建つ

正面　久昌院正四位上前羽林中將豪德天英大居士

背　施主　掃雲院殿無染了心大姉

横　延寶五丁巳六月二十八日

左右に老櫻あり。朽衰して僅に存す。是れ臥龍櫻の遺種にや風土記稿載る所左の如し。

臥龍櫻。境内佛殿の前にある櫻なり。一名を御所櫻といふ相傳ふ吉良家盛なりし時。書院にありし木なりと云。此樹は尤古木にして。その枝葉のひろこりしこと。南北へ凡二十間餘。東西へ十四間あまりなり。木のさま前後左右へ枝さし出てそのふりよき木あり。此櫻かく古木なれば。幹の内に深く枯入たる所ありて。よほどの穴となれり。此穴中に八尺あまりの蛇籠り居て。時として出ることあり。若し出る時は必ず天くもりて雨をふらすと云、又云。此樹昔はことに枝葉さかへて。四方へ三十間あまりも廣こりてありしが。いつの頃よりか朽たる所へ蛇のこもりしより年々衰へ。今は左右の枝もこゝかしこ枯はてたりと寺僧の話なり此記事に徵し此樹全盛時代のいかに奇觀なりしかを想ふべし鐘樓は佛殿の巽位に在り。二間四方。鐘銘に云。

武州荏原郡世田谷郷豪德禪寺鐘銘並序

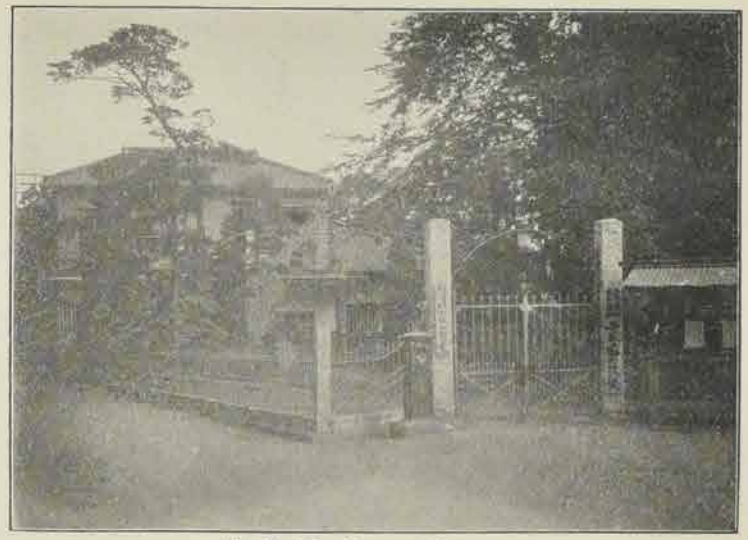
武州荏原郡世田谷郷大谿山豪德禪寺者。文明年中。世田谷御所吉良政忠公爲二伯母弘德院久榮理椿大姉一所二剏建一也。當

時兵革四起。海内相傾。靈區寶坊。陳旅駢闐。公遂移二封于壹邦一。爾後草木屢易。堂宇幾廢。唯香火之奉不レ絶如レ綫矣慶長十九年東照大神君難波之役。井伊直孝特立二軍功一。武名蓋世。以レ是叙二正四位上一。任二左中將一。令レ爲二江州彦根城主一。賜二采于武州世田谷郷一。萬治己亥卒二于武城亭一。遺言謂。豪德練若在二吾封内一。死則葬レ於レ彼。令嗣直澄唯命是從。以厚從レ之。法號久昌院豪德天英大居士。直澄襲二居直孝職一。治聲早彰。直澄卽世。姪直興爲レ嗣。直興叔母掃雲院無染了心禪尼夙歸二于毘盧遮那之不二一。其志猶欲レ興二荒廢一而薦二先考之冥福一。乃捨二許多淨資一。肇發二土木功一。宏基經營。大堂已考。安二釋迦彌勒三紺像及摩權二軀一。兼置二佛具樂器什物一。且爲寄二良田數十頃一。用二稅贏一納二齋厨一。充二僧侶一。昔者系二末派於濟北一。今也屬二正脈於曹洞一。僅傳二螢爝之燈一。後觀二佛日之光一。微力於レ是乎勠。荒廢於レ是乎興。禪尼之孝至哉。此土當二武城西厓一。堂向二南明之陽一。獻レ西嶺千秋之雪一。則玲瓏可掬。川流匯二東南一。兩奏洋々。無忱其自性虛空中之景與レ境也。是歲孟秋。頻議二山野一。大募二鳧氏一。新鑄二巨鐘一。以懸二高樓一。便四衆破二昏愚一。乍發二深省一。則遠近聞者孰不レ大二其聲一也。孚禪尼之舉於レ是爲レ盛。因作二其銘一云。

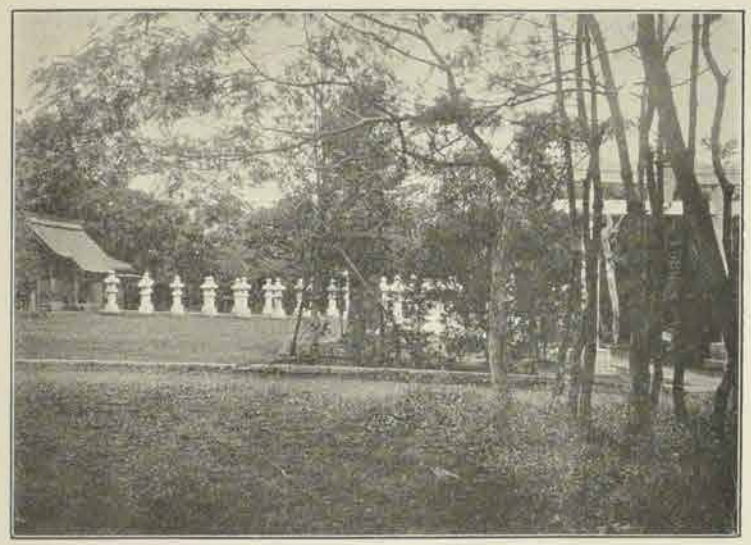
世田谷郷　豪德上方　銅鐘新鑄　樓上既抗
襍及二二百一　律諧二宮商一　眞以虛葆　德共レ音彰
魔之竄レ跡　神猶呈レ祥　湖山暮月　豐嶺曉霜

望遠の原河川玉

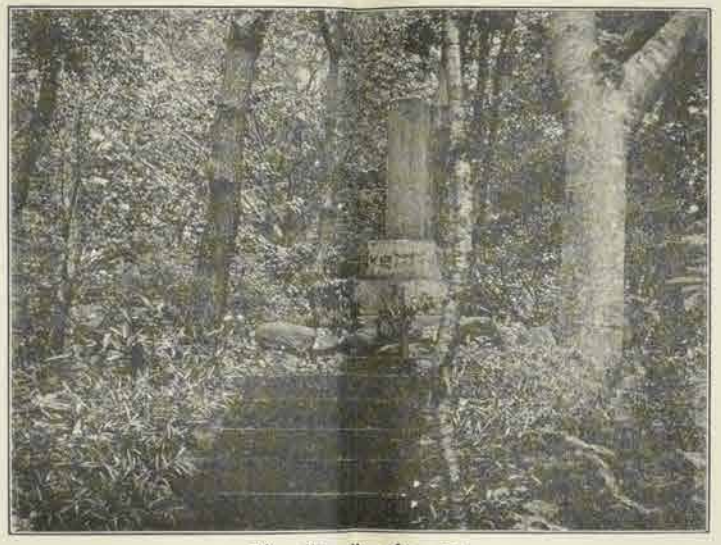
墓ノ弼直伊井内寺德豪



千駄ヶ谷町役場



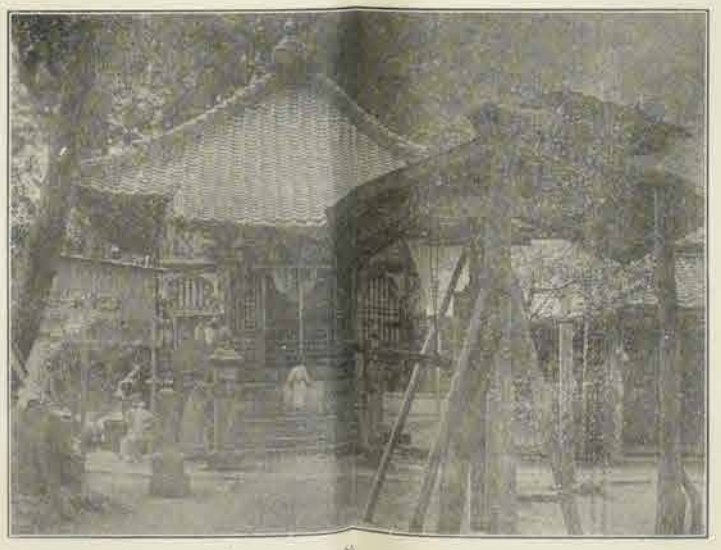
社　神　蔭　松



碑塚首瘞同

松の内境院壽仙

墓ノ他其蔭松



寺　首　聖

社　神　里　古

迷夢爰破　煩惱頓忘　此修是善、何用不レ臧
齒薦先考　明持餘慶　善鳴レ于レ道　大器無量
時延寶七歳龍集己未七月八日

豪德寺四世現住天極祕道謹誌

鐘樓の東は裏門にて。碧雲關の白字額を掲ぐ。昔時總門に掲げありしものなり。門外數十歩にして北に折れば。喬杉列立天に參し。景趣凄絶。榎の大樹など相間るを見る。地藏堂あり。横板に靈驗を記す。之を瞥見するに女人安産。瘡毒腫物齒痛、眼病等種々の効力あるよしをしるせども。豪も此像の由來を記せず笑ふべし。北方境界に左の制札を建つ。

注　意

西へ百六十間　南へ百三十間
右本寺禁獵地　豪德寺

昔時十景と稱せしものは左の如し。

清涼橋　碧雲關　楓樹林　松柏壇（井伊家の墓の邊）
臥龍櫻　照心堂（經藏なり）　枯華塔（門庵の墓）　三隅山（古城跡の坤方）
望嶽丘（古城跡なり此に富士見松あり）　黄鳥浦（所在詳ならず）

吉良家の古墳其の他は左に列記す。

○謙道師の遺蹟

三十七年間藩主の墓を守りて世に其の名を知られたる遠城謙道師は今や既に寂せり。其の幽棲の茶室は依然として井伊家墓門の側に存す。閒として人なく松風の空しく颯々たるのみ。一碑室前に在りて其の遺蹟を表す。

遠城謙道師遺蹟碑

天警薄俗。乃産若人。闢間決死。事レ君致レ身。時不レ酬レ志。遁跡桑門。英靈鎮レ此。千載不レ泯。嗚呼是可以銘吾謙道師耶。師名保敎。遠城氏。彦根藩微臣也。性樸忠勇。不敢爲讀書。略通大義。又善レ銃。當藩主宗觀公遭難於櫻田。今公襲封。幕府屢有恩命。既而免其京師守護。還納蒲生神崎二郡地。師慷慨誓以死。白君寃。潛行至老中井上正直邸。出書哀訴。將自刄。井上氏馳使報狀藩邸。藩譴師專恣。護送彦根。命謹慎。幕府追責先公罪。更削封十萬石。爾後國家多難。論者多歸咎於先公。師憂憤弗能措。乃削髮稱謙道。遂投先公塋域世田谷豪德寺。今公嘉其志節。給二口糧。移先公遺愛茶室於墓門側。卜而居之。師起臥其中。旦夕掃墓。事死如事生。三十七年弗懈。今茲五月十二日寂。享年七十九。公悼惜賜賻。准家人葬。特命瘞於先公墓側。會葬者凡三千人。有感其志而泣者。頃有志者相謀。建碑表師遺行。屬余文。乃爲之銘。

明治三十四年十二月　　從四位谷干鐵臣撰
　　正五位日下部東作書
　　從一位勳二等伯爵井伊直憲題額

○井伊家の墓所

舊彦根藩主伯爵井伊家の墓所は。當寺佛殿の西に在りて一郭を成す。墓門の前に石燈籠を竝置し。宣耀、垂光の四字を銘せり當寺の中興開基たる久昌院殿豪德天英大居士卽ち掃部頭井伊直孝の墓は門を入りたる正面に屹立す。墓道は縱橫に石を敷詰てあり。

幕府大老として國事を斷行し。遂に櫻田の難に遭へる井伊直弼の墓は南畔の中央に在りて西に面す。刻する所左の如し。

宗觀院殿正四位下前羽林中將柳曉覺翁大居士

萬延元庚申閏三月二十八日

其の實は三月三日なるは人の皆知る所なれども。こゝには幕府表向の屆日を用ゐたるなり。

墓後に當時櫻田の變に殉死したる士臣の碑あり。

櫻田殉難八士之碑

萬延元年三月三日櫻田之變。死レ之者八人。曰。日下部三郎右衛門令立。河西忠左衛門良敬。澤村軍六之文。小河原秀之進宗親。越石源次郎滿敬。永田太郎兵衛正備。加田九郎太貞雅。岩崎德之進重光。今茲二十七回忌辰。樹石=於先考墓側=以表=忠節=云。

明治十九年三月二十八日　從四位勳三等伯爵井伊直憲識

墓域には歷代の墓其の夫人等の墓二十餘基あり。而して巨松散立し。甚だ幽邃なり。

○弘德院並に吉良左京太夫政忠の古墳

弘德院並に吉良左京太夫政忠の古墳は。佛殿の西墓域に在りて。老松樹下に二墓の五輪の塔竝び立てり。確かに四百年以上のものなり。側に碑あり其の顚末を記す。

當山舊開墓碑銘

清和天皇十世之胤足利左馬頭義氏二子。嫡名義繼次名長氏長氏居=三河=。是稱=吉良=。義繼居=奧州=。是稱=奧州吉良=。此則吉良姓祖也。義繼六傳名吉良治部大輔治家。治家始城=武州世田谷=居焉。時人稱=世田谷御所=云。又六傳稱=吉良政忠=。法號洞春院殿照岳道旭居士。以=文明中=爲=其伯母弘德院殿久榮理椿大姉=。創=建禪刹=號=弘德寺=。請=濟下老宿馬堂昌譽禪師=住焉。是吾寺先開基因由也。厥後至=天正中=。漸就レ蕪。于時吾宗關禪師來而董レ席焉。是吾寺革=洞門=之開山也。至=萬治中=。革=弘德=爲=豪德=焉。蓋採=今中興開基久昌院殿豪德天英大居士法號=。而=以弘豪倭音近=也。先レ是靈潭應=大檀君之鼎命=董席。然不レ知=先開基墓所在=。雖レ有=客來而詢レ之者=。亦不レ能レ對。頗以慽矣。會掃=開山塔=。深窺=林間=。有=二古墳=。沈=榛翁中=。剪伐顯レ之。剝レ苔視レ之。左則洞春院殿。右則弘德院殿。文字歷然見。西古松下據レ法以移=二墓=嚴々。庶使レ將來之寺主朝夕歲時愼=之香華=。潔=之粢盛=。無=復如=潭之慽=也。今發願欲レ造=立碑=。而其臣今猶存者。或仕=諸侯=。或下=民間=。胥共戮力。補=助潭之志=。今也既成矣。因爲=之銘=曰。

於庶王孫　維吉良祖　我山創建　功德之圃
物換星移　□委艸莽　今爰相レ攸　愼遷=神宇=
亭々松陰　佛殿西廡　抗=操雪霜=　持=節風雨=
不レ散=莊嚴=　以變=之古=　請=吾後人=　審=彼系譜=

維時寛政十一年龍集己未十一月日

現寓十五世靈潭魯龍撰焉

○夢さめし古城の春々蝶一ツ

○吉良家の城址

吉良家の城址は豪德寺の傍字竹ノ上に在り。一町餘の地にて濠跡今猶存す。蔓草茂りて其の狀荒涼たり。思ふに幕府時代よりこゝには手を著けざるものと見ゆ。東都一覽武藏考に「古城址豪德寺の東の山にありといへど。今は叢樹しげり。荊棘生て道を取べきなし。冬より春の間にはのぼるに便よかるべし」としるせり。以て證すべし。

風土記稿に。この所は昔吉良家の居城ありし地にて。天文、弘治の頃家風さかんなりしときは世に吉良の御所と稱せり。されば今も里人は御所蹟とてあかめおけり。その地勢をみるに分內もうちひらきて二重に堤の形のこれり。その內にすこしく高き所二ヶ所まであり。櫓の跡といへり。傍に御所櫻と稱する古木の櫻一株あり。又富士見松といへる古松も立てり此所より富士の嶽をのぞめば甚だ佳なりといふ。これみな吉良家のころ植置しものなりといひ傳ふ。按ずるに吉良系圖に治部太輔治家始て武州世田谷に居り。後上州館間に移り住せりと。衾村東光寺の古文書にも。治家この寺を建立せしよしみゆれば。治家が代にこゝに住始しは疑ふべくもあらず。この人應永二十四年四月十日逝せりといふ。或は延元元年十一月七日ともいへり。其後の事蹟はつまびらかならず。治家より六代の後左京亮成高はこの城に居りしよし系圖に見ゆ。これ天文十五年に逝きし人なり。その子左兵衛佐賴康その子氏朝に及ぶまで。この城にありしと見ゆ。是天正の頃のことなるべし。其後世もうつりかはりて御入國のとき廢せられしかば長く此地を井伊家にたまひ。それよりのちは林となりて樹木のみ生しげり。今に至りてもなをしかり。」

是にて城址に關する沿革の大要は知ることを得たれども。尙ほ山崎美成の提醒紀談に載る世田谷舊跡と題せし記事を抄出して之を詳かにすべし。

豪德寺の東の山を里人は城山といふ。吉良家の城跡なり。登りて見るに。堀の跡分明見へて水をたゝえたり。此山に古木の松あり。吉良家の頃よりのものと云ひ見立之松といふ云々吉良と稱するは。足利家の嫡流足利左馬頭義氏朝臣（吉良氏家系諸書異同あり。その詳なることは吉良正嫡考に見ゆ）嫡子從五位下左馬頭義繼朝臣。三河國吉良の庄に住て吉良左馬四郎と稱す。この人入唐歸朝の後陸奧國に下り給ひ藤谷の庄といふ地に居住す。これ吉良東條の祖なり。義繼朝臣より四

代貞家朝臣。陸奥國一方管領となる。その子治氏朝臣これ又陸奥國一方管領として武功あり。其子治家朝臣陸奥國より上野國館間に移る。又持氏卿より武藏國世田谷を賜ふによつて初めてこの地に住給ひて世々世田谷殿と稱す。その頃此邊城中町家にて頗る繁昌なりといへり。この代に勝光院を開基すと云。治家朝臣より八代氏朝朝臣實相院と號す。この頃は何ほどの貫高にや。土人は十八萬石といへどさだかならず。しかるに明應の頃より伊勢新九郎長氏(後に早雲と稱す)伊豫國に起り。相模國小田原の城主大森實賴を攻落し。居城として早雲より三代氏康より。關東に威をふるひ七國を領したれば關八ヶ國の大小名その下知に從はざるはなかりしとぞ。これより先き世田谷賴康(氏朝の父)をも聟とし。いよ〳〵關東に猛威をふるひけり。その後天正十八年豐臣大閤の爲に。小田原沒落の時ともに落城し。上總國にのがれ給へり。御打入の時氏朝をはじめ關東の大小名。本領安堵凡そ二十餘家。その後吉良家上總國長柄郡寺崎村に於て千百二十五石を賜れり。世田谷はあげ地となるといへり。氏朝は上總國に移らず。世田谷に隱居して學翁齋と號し給ふ。その居住の地は今の弦卷村實相院なり。今に構のあと堀のかたちも殘りてあり。

●菅刈橋　常盤橋

菅刈橋とは小名横根より北方にある渠水に架せし小石梁をいふ。此邊もとは總て菅刈庄と稱す。其の名の今に存するはめづらし。

常盤橋の下町の傍にある渠水の石梁をいふ。土人其の名の由來を傳ふ。卽ち一場の悲慘なる物語なり。

世に世田ヶ谷御所とたゞへられ榮華の夢濃かなりし吉良左衞佐賴康に十二人の愛妾ありけり。こゝに永祿の四年其の家に仕ふる大平出羽守某奥澤の館より其の女常盤を進めける。常盤容姿妍麗にして他に比すべきなし。賴康一見大に之を寵す。十二人殆ひど顏色なし。されば愛情一身にあつまり幾程もなくして懷姙せり。こゝに至りて彼の十二人益々妬心を生し。巧言もて種々に讒訴し。他に情夫あるが如くにいひなしたれば。其の寵も次第に衰へぬ。常盤は之を知り遺憾やる方なく。遂に城をさまよひ出。此橋の邊に來りて自害して果ぬ。或は讒者の爲めに殺されしともいへり。此時其の切口より男子生れしが其のまゝ死せり。悲慘の狀想ふに餘りあり。其の後賴康は常盤が非業の最期を遂けしは。皆讒者の所爲に出たるを知り。殊に男子さへ出生せしかば。深く後悔せしが奈何ともすべきやうなし。今は追福の爲めとて。此所より路の程も遠からぬ馬引澤村にかねて信仰せし八幡宮の社ありしかば。かの男子を祀りてめて若宮八幡といひ。常盤をも其の傍に祀る。今辨財天の祠と稱するもの是なり。かくて賴康は十二人の妾を一々糺問し。罪狀明白となりたれば。之を若林村の邊に引出し。悉く死刑に行ひ。常盤が塚を首め若林より上馬引澤に至るまで十三所へ其の死骸を埋めたり。今も其の所を十三塚と稱せり。ある年土人其の塚を毀ちしに。多く婦人の手道具、鏡の類を掘出せりと。

常盤の事はよしありとするも若宮八幡十三塚の事は信じ難し。又江戸名所圖會には左の如く載せたり。參考の爲めに是をも揭くべし。

常盤橋　二子街道中馬牽澤村世田ヶ谷入口三軒茶屋の往還角の所より向へ三丁計り入て小溝に渡す石橋をしか名く。里諺に云く。昔吉良賴康の妾常盤といへる婦人不義の事ありて此所に害せらる。然に其靈人に祟る。依て其靈を辨天に崇め。其腹に出生の男子を若宮八幡と崇奉るといふ。何も上馬牽澤村に在り。此常盤と云へる女は太平出羽守が女なる由世田谷私記に見へたり。

按に此はしより二十歩計り東の方道より北側に松を植たる塚あり。是を常盤の墓といふ。上に不動の石像あり。又同じく南の方にも塚あり。是なりともいへど。いづれが實ならひ。

かく記載せられては常盤も寃罪なり。作者に對して恨を訴へざるべからず。右にいふ八幡宮は今の駒留神社なり。同神社の實況は前編に載せたり。

●八幡神社

八幡神社は字宮ノ阪に在り。因て土人は宮阪八幡宮といふ。世田谷の鎭守神なり。岡に倚りて社宇を構ふ。入口に石の鳥居あり。警視廳の制札を建つ。石階十七級を登れば石獅を双置す。盥石には「江戸麹町山元町願主秩父屋彌七」とあり。更に八階を登れば上の平地に社宇ありて南に面し。茅葺にて二間四方。前に石燈籠二基を双置す。東に三十七八年記念碑を建つ。乃木大將の筆なり。

當社大祭は毎年八月十五日とす。

風土記稿に其の由來を記して云。社傳に云當社は天喜年中奥州の逆徒退治の時。從三位源朝臣義家の勸請にして。其後數百の星霜を歷て。天文年中吉良賴貞の再造ありしなりと。按に此說妄誕にして最も無稽の事なり。天喜四年源賴義命を蒙りて奥州の安倍賴時を伐しは。正史に顯るゝ所なり。義家がために奥州の武衡家衡の亡びしは。寛治五年の事にして。天喜を去ること三十六年の後なれば。是等の事は更に論ずべくもあらず。又文安年中吉良の御所世田ヶ谷に居城ありし時。此宮を氏神と崇敬し。社領もあまた寄附し。新に宮柱を造營ありしと云々。此說もうけがひがたし。既に當社の棟札に天文十五丙午八月二十日新立。十二月二十日癸卯御遷宮と記す又當社八幡宮新に建立し奉る大檀那源朝臣賴貞ともあれば。此時初て造立せしこと著し。然るを社人いかにも舊社とせん事を思ひて。其事跡をも糺さず。かゝる附會の事を傳へしな

るべし。天文の棟札は左の如し。

天文十五丙午八月二十日(新立)十二月十六日上棟
同二十日癸卯御遷宮
供養導師鶴岡相承院法印大和尚住元
同華覺院權律師
當社八幡宮新奉立大檀那源朝臣賴貞　花押
于時惣奉行江戸攝津守法名淨仙
大工奉行石渡戸新兵衛常久　惣大工　山井大藏丞
西村左近將監吉宣　由木内匠助
鍛冶奉行　松原　藤六貞口　大工　青木右馬助安重
鈴木藤十郎有宗　熊澤入道
鶴岡承仕　法橋丸圓
法橋丸喜

世田ヶ谷の内吉良家の古蹟たる寺院尚ほあり。そは實地探査の上次編に記載すべし。

◎松澤村

松澤村は荏原郡に屬し。其の西北隅に位置し。世田谷村の西に續けり。もと赤隄、松原、上北澤の三村を併合したるものに係る。

赤隄は吉良家領地の頃より村落を成し。後ち服部久兵衛の采地となりしが。更に幕府の直轄に歸し。以て明治に至りぬ。

松原は吉良家の臣松原佐渡守が開墾せし地なり。其の所轄の沿革は赤隄に同じ。

北澤は古へ此邊に澤多く深澤、奥澤、馬引澤等の各村南にあれば。是に對して北澤の名起りしならむといふ。昔は吉良家の領地なりしが。天正十八年以後伊丹播磨守に賜り。寛永十五年一時幕府の直轄となり。翌年中根壹岐守に賜り。元祿十二年の春に至り。又代官所となり。正德三年四月更に文昭院殿の靈廟料として增上寺に寄附せられたり。

●松原乙女椿の奇實

明治四十四年五月松澤村松原七百二十七番地鈴木米次郎の庭園に在る高さ約五尺の乙女椿に一種奇形の實を結びたりとて聲評喧しく。觀覽者日々群を成し。爲めに物賣りの露店十五軒も出たりといふ。編者其の實寫圖なりといへるを一覽せしに長さ三四寸其の狀恰も首なき人形を抱き合せたるものゝ如し色は淡白色を帶びしよし。想ふに是は躑躅などになるモチの類にて蟲蝕によりて液汁の凝結し遂にかゝる奇狀を成したるならむ。決して海石榴の實にはあらず。

澁谷よりこゝに至る途上海石榴に猿の形をなしたる實又は桃の實のなりしものありと傳へられたり。

此等は一時の事に屬すれども。聲評高きものなりし故こゝに記す。

（。此村の富貴は是か花の庭）

●上北澤の牡丹

上北澤の牡丹は其の名高し。東都歲事記四月の景物。牡丹とある條に。

上北澤村鈴木某園中三百餘品あり大木多し片鄙といへども江府の貴賤尋ね來る人多し

とみゆ。四方の道草に鈴木左内宅別搆牡丹花壇の圖あり。此圖に據れば。北に堀あり。其の垣には山吹を植。西に寄りて外搆入口あり。花壇の外通りは葦簀にて圍み。東西に長く花壇を設け。其の間四條の道を通す。中央に濃艶亭あり。花壇の上には雨障子を掛く。園の入口は東に寄りて設く。園は拾間餘に八間許。牡丹凡二百五六十種ありとて。其の花銘を揭げたり。

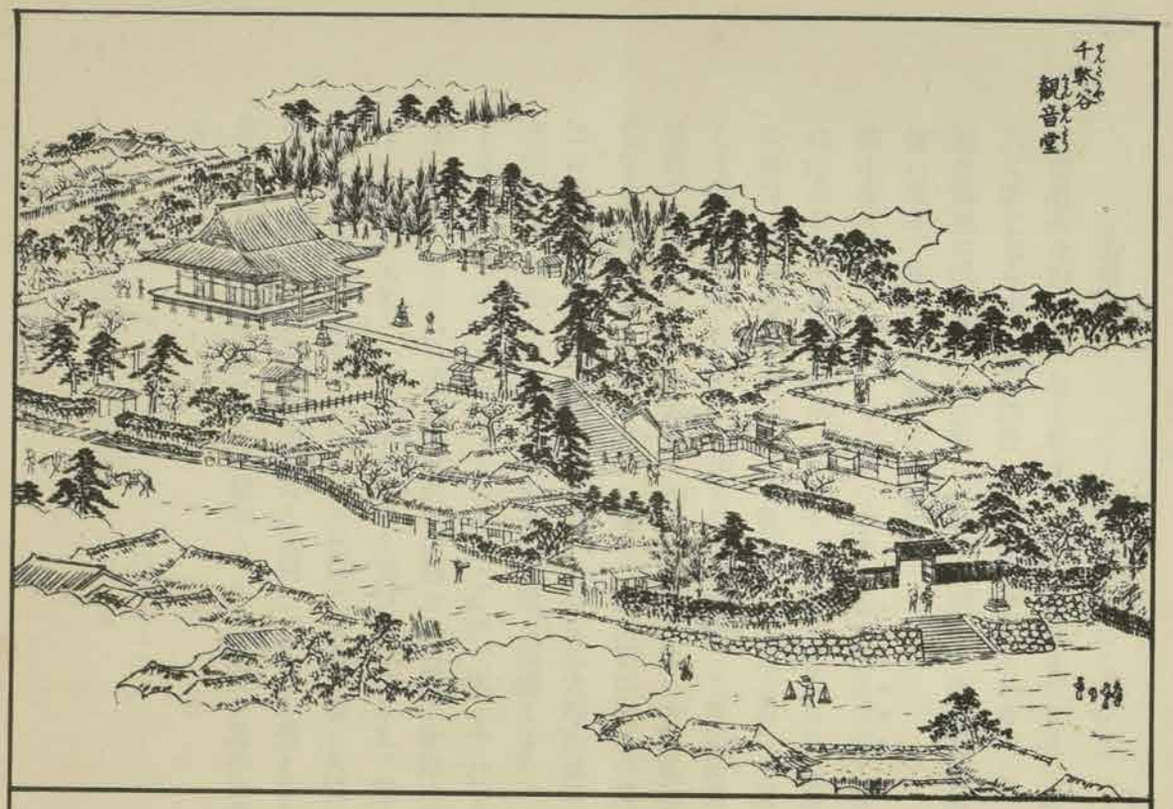
凝香園花銘　鈴木左内

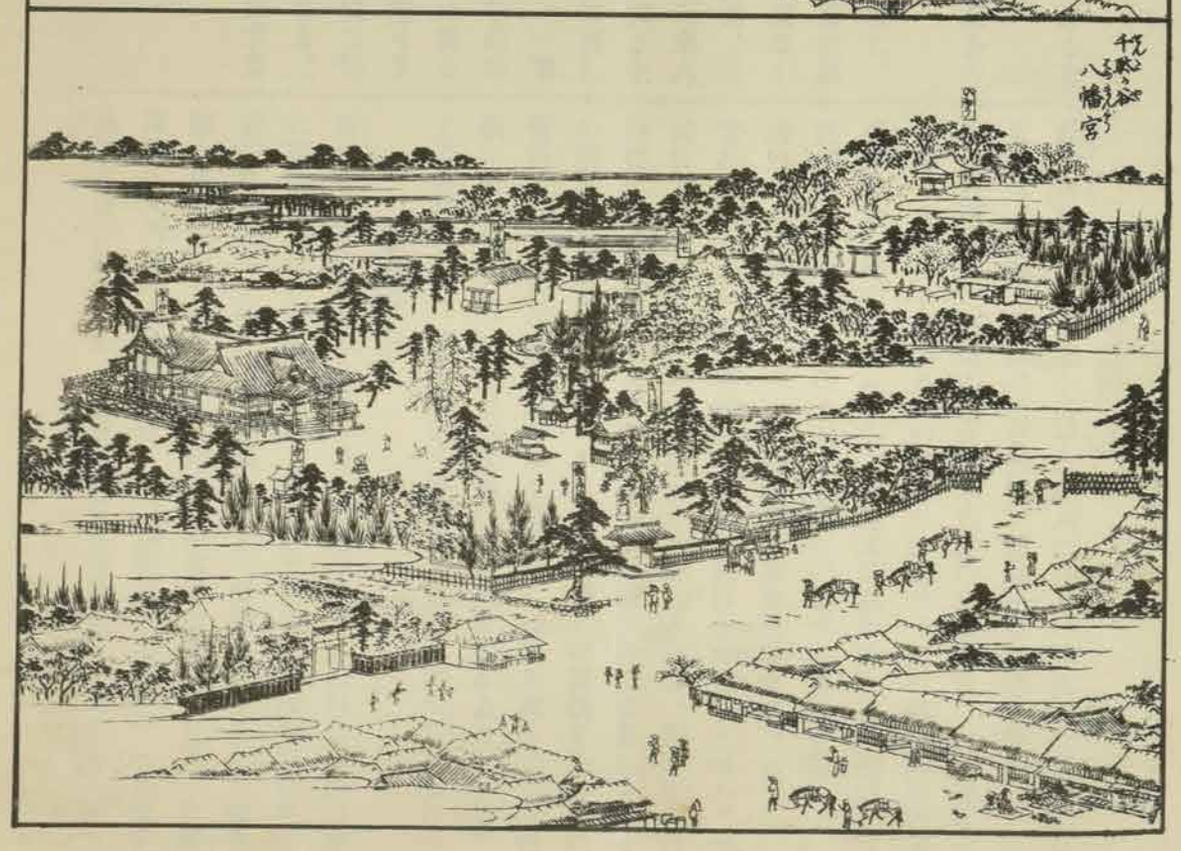
一の花壇五十九種

冷月　乙女紅　東かゝみ　玉珊
松友　室の戸　花王蓮　玉珊集
豐の明　大内姫　御稜川　今出川
裾濃威　春の湊　玉門花　尾山
名取川　瀧の音　十五城　綾の上
夕つく日　由良の戸　無口笛　返歌時雨
直時雨　芙閣蓮　西王母　浪の旭
鵜鳥　採桑老　阿房宮　須彌山
八十島　笑獅子　鏡臺山　青ふく見
長生閣　御簾□　薄絹　韓國紅
紫金閣　飛龍閣　還城樂　壽き
鹽煙　紫雲城　藤ヶ枝　面艶臺
雪下潭　申九印　金陵臺　男石
遠寺山　蓮旭山　太平雀　金毛
日暮里　四の海　姿鏡

二の花壇　五十九種

鎌田藤　いもせ山　初瀨山　東光
櫻筏　錦島　小式部　鵜の羽
藤島紅　銀ふくりん　風波山　四方底
代々撰　姜女鏡　無一物　春の曙
文字摺　金ふくりん　貴玉　御所車
獅子ヶ峯　玉天集　玄上紅　槇立山
蓮泉圖　千里の濱　蓮鶴　雲の上
大海　八ヶ代　松兒島　麗日
田毎　ひむろ山　朝霞　既旺紅
雪のあした　藤乙女　色千染　高臺
金盃雪　嘘月　瑠璃盤　大花山
伽羅戸　松の雪　天の暈　甚紅鏡
風の音　鹿毛錦　獅子吼　定家
墨流し　濃岩戸　天印　建章宮
玉簾　東海　黃鶴光





三の花壇　十四種

涙まくら　人　丸　雪の松　音羽山
五臺山　唐　崎　八重垣　松風樂
醉美人　廣ヶ濱　往來の關　瑠璃紅
眞名鶴　普賢象

四の花壇　十七種

千代重　四百餘州　色宿里　大　鵬
染　絹　八乙女　鳳凰閣　鳴　戸
朝　鏡　金冠纓　仙桃閣　藤網綾
三千秀　玉井蓮　善知鳥　國　常
桃色千重

五の花壇　五十九種

□獅子　黃金判　[illegible]　代々雪
須　摩　金　鳳　唐　織　迎　日
亂獅子　谷間雪　武　者　駒　嶽
墨　龍　蘆田鶴　錦　島　袖　照
歸去來　豐部山　野守鏡　花　橘
陽比山　越女裙　西宮宴　別　龍
不可思議　想夫憐　明石潟　白　鶴
曙　蜀江錦　更　科　安養寺
雲　紫　立　花　百夜車　關　風
八重葎　萬　代　思の儘　芙蓉紅

羽衣の袖　東芳海　龍　車　入日の海
雪の窓　初　戀　若草山　柴　舟
下　染　弓張月　朱呼紅　小夜時雨
五采櫻　四神相應　百花頭　蒼窟龍
日出鶴　和光山　武陵溪

六の花壇　五十九種

若　紫　越　路　月　桂　色の關
都富士　洞入獅子　藤　造　笑隱し
日の始　大白山　光運山　ふじ白山
あら玉　樹　下　金翅鳥　黑木御所
和田ヶ原　寒河鷺　そめ絹　移し心
色王集　染　殿　無透際　秋津洲
錦の袖　國　常　玉露山　水無瀨川
織　錦　隨一紅　さゝれ石　青列白
志摩浦　唐　竹　藤王閣　大和歌
きりん閣　吳　竹　涼　鬼　三　國
代々渡　隅田川　沈香亭　南明紅
楓林紅　サチ山　あや羽　初　染
八百紅　七小町　御代松　錦　帶
三笠山　龍　門　明日香川　龜　紅
玉守宮　大　曲　鈴　尾

七の花壇　四十七種

不殘實生　　天保四年癸巳四月十日寫

右の牡丹今むかしの如く存するや否。編者未だ實見せざるを以て之を知らず。他日踏査して尙ほ記する所あるべし。

凝香園並に濃艶亭の名は李白が清平調詞の一枝濃艶露凝香の句に取る。牡丹には適當の雅號なり

鈴木左内當村の舊家にて。其の祖先を鈴木但馬重經と稱し。北條左京太夫氏康に仕ふ。永祿十二年十二月六日北條新三郎に從ひ。駿河國蒲原の城に於て武田信玄の兵と戰ひ。利なくして死す。重經三子あり。嫡男新八郎重繼、二男新助某、三男新平重貞といふ。重繼始て北澤村に來り住し吉良家の家人となる。後故ありて家を重貞に讓り。德川家に仕へ。天正十二年四月九日尾張國小牧合戰の時。井伊兵部大輔直政に屬し戰死せり。新助は別に召れて幕府の鐵砲玉藥組となり。一家を立つ。新平は此にありて吉良に仕へしが。天正十八年北條家亡び。吉良左兵衛佐氏朝上總國に移りし時獨り此地に留るもと其の家人たりし益戸庄五郎之を養ひ居りたるも。幾もなく重病に罹り嗣子なきを以て。庄五郎に家名を讓り文祿二年歿す。是より庄五郎は鈴木但馬と改稱し。此地の農となる。其の子孫村内に數多分れて連綿たり。左内は實に其の宗家なりといふ。

●駒澤村

●駒繋神社

駒繋神社は下馬引澤小名子ノ神丸に在り。駒澤砲兵營の南位に當る。田間の石疋二所を過ぎ。蛇崩川の板橋を渡れば。丘下に石階あり。三級の上に丸木六足の鳥居を建つ。石階五級を歷。更に二十五級を登れば丘上に達す。西に茅葺四間の神樂殿あり。社宇は南に面し。拜殿茅葺素木造りにて三間。本社は瓦葺素木にてそれよりも小なり。繞すに木柵を以てす。境内多くは杉林にて。二圍餘の老松處々に挺立す。

當社はもと正一位子明神社と稱し。或は子神權現と唱ふ。祭神は大巳貴命なり。因て此處を子ノ神丸といふ。想ふに戰國時代には小塞などの在りし地なるべし。明治以後何によりてか駒繋神社と稱するやといふに。此の丘下の田畑を馬引澤の舊跡とし。文治年間荏原野より東條葺毛の馬を選みて之を賴朝に獻せむとし。此地を索き通りしに躓きたるより止めたりとの傳說あれば。其の緣故に據り更に此名を附せしならむ。

●西澄寺

西澄寺は下馬引澤小名原に在り。砲兵營舍に沿ひし道路の南に西澄寺入口の石標を建つ。此徑路を南行すれば右に當れり當寺は日輪山と號し。藥王院と稱す。新義眞言宗にして楠樹郡小杉村最明寺の末なり。創立の年次開山等詳ならず。中興開基は大久保六右衛門忠勝にて。寛永七年九月二十一日歿す法號を淸涼院といふ。中興開山は宥秀和尙にて寛文十二年十

一月二十一日寂す。

●三軒茶屋より多摩川に至る

沿道の略案内

三軒茶屋は所謂追分にて分岐點なり。左折電車線に沿ふて行く一路を大山街道卽ち多摩川に至る正路とす。直行すれば若林、世田谷に達す。松陰神社、豪德寺等に詣る者は此路に就くを要す。

大山街道を進めば。電車線は道路と暫く分れて又合す。其の狀弓に弦を張りたるが如し。道路は此間低くして田園を經。小石橋あり。蛇崩川の源流に架す。既にして上馬引澤に入る駒澤村役場あり。品川用水に架したる旭橋を渡れば。東京區裁判所駒澤出張所あり。廨庭棚上に牽牛花の盆栽を陳列しあるを見る。間雅想ふべし。左に宗圓寺と駒澤尋常高等小學校あり。進むこと數丁左に一路あり。九品佛道と大書深刻せる朱字碑を建つ。又是より十二丁東京府園藝學校と書したる標示もあり。卽ち是を等々力(とゝき)の淨眞寺に詣る道と爲す。右に駒澤停留場あり。

是より世田谷新町に入る。品川用水は始て道路に沿ふて其の北を流る。此間全くの村道にて眼を慰するに足るものなし。新町停留場あり。既にして品川用水は北折して去り。玉川村大字用賀に入れば。景趣漸く新なり。旅館飯田樓の前方に用賀停留場並に近來開設せし園藝場あり。阪路を下れは左に府中道あり。田圃間の田中橋を經て進めば。同村大字瀨田に抵る。玉川村立京西尋常高等小學校の前を過ぎ。瀨田停留場を經れば。電車は右に新開せる長阪を走りて多摩川の東岸に直進す。左の道路を行けば行善寺の前に出づ。夫れより阪を下り六鄕用水に架せし調布橋を渡り。迂折して進めば二子の渡に達す。更に岸に沿ひ。西北に行けば電車の終點に著す。

◎上馬引澤

上馬引澤(かみうまひきさは)は下馬引澤に對する地名にして今は駒澤村に屬せり其の位置は三軒茶屋の西に連りて玉川村大字用賀に接し。二子道卽ち大山街道其の中を貫通す。小名に芳久保あり。

●宗圓寺

宗圓寺(そうえんじ)は大山街道の東側に在りて品川用水に接せり。八幡山と號す。駒留八幡神社の舊別當なり。曹洞宗にして東京駒込大圓寺に屬す。

開基は心曇宗圓と號し。文保元年十月二十三日寂す。此宗圓こそ駒留八幡神社の條に記せし經筒の銘にある北條左近太郎入道成願が事なりといふ。成願後に此處に菴を結び神社を守護せりとぞ。風土記稿に宗圓は北條左近太郎が事なりといふは疑ふべし。其故は經筒の銘に德治三年の頃は此人入道せしよし見ゆ。夫が文保元年に死せしといはゞ。其間六十九年の後なり。かく長生なることおぼつかなし。宗圓は自から別人なりとせばさもあるべきか。」としるせり。是は大なる誤算なり。和漢年契を檢するに年次は左の如し。

丙午	德治	
丁未	二	
戊申	延慶	
己酉	二	
庚戌	三	
辛亥	應長	
壬子	正和	
癸丑	二	
甲寅	三	
乙卯	四	
丁巳	文保	
戊午	二	

かくの如く德治三年は卽ち延慶元年なれば。文保元年までは僅かに九年に過ぎず。全く誤算に出たるを知るべし。宗圓は果して左近太郎なるや否を斷ずる能はざるも。年代は當れり墓域に開祖喜山正存大和尙と刻したる墓石あり。是れ別當寺を開基せし人にて。寛永十八年六月二十八日寂す。かゝれば初めは菴にてありしを中興せし故に。開祖と稱せしなるべし

●玉川村

玉川村(たまがはむら)は荏原郡に屬し。多摩川の流域に沿へる土地にして。尾山、奥澤、等々力、用賀、瀨田、野良田、上野毛、下野毛の舊八村を併合したるものに係る。

多摩川俗に玉川と書す。因て新に村名と爲したるなり。今玉川と書する一例を擧れば。水道を開鑿せし庄右衛門に幕府より玉川の苗氏を賜與したるが如き以て證とすべし。

◎用賀

用賀(ようが)は玉川村の大字にして。舊世田ヶ谷村の枝鄕たる世田ヶ谷新町の西に連り。同村大字瀨田に接す。大山街道其の中央を貫通せり。永祿元龜の頃飯田帶刀同圖書の開拓せし所といふ。幕府時代は井伊家の領地たり。

小名　上方(北西)　下中央(南東より)　三ッ谷(西邊)　中丸(西隅)　本丸(東方)　向原(坤位)

●八幡神社

八幡神社(はちまんじんじや)は大山街道より南へ三四丁入りし林丘に在り。當地の鎭守神なり。石の鳥居に天保三壬辰年九月吉辰用賀村總氏子中とあり。社宇は茅葺素木造りなるが。六月十九日の暴風に壞倒し。編者探査の日は其の儘になり居れり。祭典は九月十五日とす。

●觀音堂

觀音堂(くわんおんだう)は小名三ッ谷に在り。大山街道の北側に長方形の碑を建て。「道端の木槿は馬に食れけり」蕉翁の句を刻す。是より北に入る二丁許の處とす。無量寺といひ。宗珍山觀音院と號す。淨土宗にして東京芝西應寺の末なり。開山は光蓮社明譽

壽廣和尚文祿三年八月十八日寂す。門内に若木の櫻を植う。
觀音は行基菩薩の作なりといふ。境内に古碑四基あり。
元享□□十二月　延文二年七月日
文和二年二月日　應永五□年十月二十日
此外にも斷碑多く見ゆるよし風土記稿に載す。

●眞福寺

眞福寺は小名下に在り。無量寺の東方に當れり。本堂は茅葺素木造りにて。門前左右に地藏尊各三軀を置く。
當寺は實相山と號し眞如院と稱す。新義眞言宗にして等々力滿願寺の末なり。開山宗圓和尚天正六年六月二十日寂す。開基は飯田圖書。法名華嚴院法譽善慶居士天正元年歿す。創建の年代推して以て知るべし。
本尊大日如來は淨土宗なる淨眞寺の開山珂碩上人の作なり。故ありて當寺に安置す。

◎瀨田

瀨田は玉川村に屬し。用賀の西に續き。二子道を挾みて多摩川に臨めり。もと井伊家の領地なり。
小名　上（西北の方を云）　下（東南の方を云）　奈加良（下の内にて八幡神社の邊をいふ）
天保二年九月三日の嘉陵老人紀行に「瀨田村、なら柴なんど生茂りたる中道を行。所々民家あり。折からの落栗を湯引て小さき器に盛。一ッかあたひ錢四文に換。家は門より引入ていつくともしらぬ。所々にも道の傍にさし置。先にかふたる人の錢も栗もあれど。行きの人も稀に盜心なきのみかは。野に遊ぶ里の子らも更にとることなし。都人のならはしにくらぶれば幾くの直きを見る」とあり。當年の風俗想ふべし。

●行善寺

行善寺は大字瀨田に在りて多摩川の東岸に倚る。獅子山と號し。西光院と稱す。淨土宗にして多摩郡北見村慶元寺の末なり。開基は長崎伊豫守行善にて。此等は昔時小田原に在りしが。長崎氏此地に移住せし際こゝに移せしと云。開山は法蓮社印譽上人傳光和尚と稱し。天文二十一年六月二十九日寂す
當寺入口に多摩川新四國八十八ヶ所第三十八番と標示す。門外北側に一堂あり。藥師並に不動尊等を安置す。南側に征清紀念碑を建つ。「虎のふすてま唐土の果までも」云々の歌を刻し。正三位海江田信義書と署せり。又觀音堂あり。門内には櫻を植たり。
墓域に「西尾家祖光之碑」あり。之を讀むに其の祖先は鎌田兵衛正清にて。正清平治元年尾張國野間に於て其の主義朝に從て殉死せしかば嫡男次郎遁れて此地に來り農業を修めしよしを記せり。其の末に瀨田住西尾亥三郎と識す。是れ現戸主なるべし。此事は風土記稿にも載せざる所なればこゝに特記す。
當寺は多摩川に對する眺望佳絶なるを以て。十一代將軍德川家齊公も駕をこゝに駐めて。觀魚臺に充られたることありしといふ。嘗ては小菅香村先輩の家にて多摩川水源より末流に至る沿岸の風光を圖したる横卷を展覽したることあり。是れ當寺の所藏なりとを聞けり。

（。坊の客先つ多摩川を馳走かな）

●行善寺の眺望

多摩川に遊ぶ者は先づ行善寺に立寄りて眺望するを例とす。左に古人の記する所を掲げて之を證すべし。

秋野草分（林檉宇）

はるかに見やれば。向ひの木立薄くこく色分るは。玉川の近よりしなるべしと。うれしくて足もとまらぬ計りとく行に。古き寺あり。行善といふ。眺望にたへなる所と聞ゆれば。立よりしに。あるしの僧待得かほにて。筵しきつらね茶などくみ出て。ねもころにものす、爰よりうち臨めば玉川の流こゝかしこにわかれて。いくすじとなく白き練を引はへたるさまして。向岡は木ふかき緑のかさなれるそが。上に富士の根高く聳て。すそには足高、箱根二子の山々より。秩父甲斐かねまでけちかき程にめぐらして見ゆ。さながら秋のしるしにや。薄霧のやゝたちへだてたるも。また只たならず。

雪しろきふしの高根はあらはれて
霧に奥ある秋の山々

ふたりのともからも韻などさぐりて。唐うた作り出せしかは。自も短き筆とりて拙なき一ふしを壁にかい付たり。

玉川遊草（林梧南）

經レ津訪二行善寺一。憩二其西菴一。僧爲二舊知一。瀹レ茶以供。時殘照映レ空。山皆作二紫翠色一。須臾一望蒼然。棲鳥群噪。暝鐘隱々遠吼。

四方の道草

行禪寺に至る。萱ふける門に額あり。獅子山華頂大僧正何某書とあり。入て右に藥師堂あり。本堂東に向。庫裡に入てみれば。白頭の老奴あり。書院のなかめよしと聞て參りしなり。さはる事なくは眺望を乞よし聞へしかは。安き事ながら常は書院も房もおろしこめ置侍れば。庭より房の緣に上りて見そなはしたまへといふ。主の僧は鉢をひらきにとて留主なりといふ。やがて庭に行て西南の方を見さくれば。近くは平田の稻いろ付たるを見。又玉川の流田の面につらなりて二三灣をなし。遠樹緑黛の如く。近樹は盆玩の如く。上にいと高きは富士の嶺はさらなり。大山つゝきの山々。秩父の諸山その北に連接し。折しも近山の巔雲を吐をみる最佳。只惜らくは庭の山崖に立のひたる槻か榎か三本あり。聊遠望を礙るを覺ふ。

以上記する所に就て其の風景の大要を知るべし。今も猶ほ昔時と異なるなし。但東岸の方面には電車開通し。夏期納涼及び香魚漁獲等の爲めに此地に遊べる京客の料に設けたる旗亭

相列したれば。眺望は却て。趣味を加へたり。然れども天然を愛するものは。風光を俗了したりとやいはむ。時勢の變遷此の如きは免れざる所か。

●玉川神社

玉川神社は。六鄕用水に架したる次太夫橋を渡り東北に行く崖上に在り。埴阪を登れば石の鳥居あり。明治二十八乙未年八月七日瀨田大塚貞二郎、溝口石工内藤慶雲と刻す。次に石燈籠二基あり。次に又鳥居あり。總て前者に同じ。次に木製の舊鳥居を建つ。石階十級を拾へば。正面に茅茨の祠殿を構へ玉川神社と扁す。明け放ちにて殿内履物無用としるしあり按するに當社は舊御嶽社ならむ。風土記稿慈眼寺の條に。御嶽社境内南の方にあり。今神體なし。社僧相傳て云。此社の神體は劍を持て五大尊の形に似たるものなり。昔土人地中より掘出し。其所へ社を建て祭り置しか。さまゞの奇怪あり或は社前を馬などにのりて過しかば。その咎にや思はず怪我せし者も有しとて。其上に一ッの小社を營み立。是今の社なりと。古の宮地も耕地の内に古宮の地とて殘れり云々。明治以後今の名に改めたるならむ。

社地は老樹を繞らし。富士見の瀑。玉川遊園建設地を脚下に控へ。向岡、多摩川の全景は寸眸の中に落つ。夏日の納涼は勿論晴雪の佳趣想ふべし。

社を距る十數歩の地に明治三十七八年戰役紀念碑あり。乃木大將の筆する所に係る。

●慈眼寺

慈眼寺は玉川神社の鄰地に在り。喜樂山と號し。教令院と稱す。新義眞言宗にして橘樹郡小杉村最明寺の末なり。開基は長崎四郎左衛門にて。開山は權大僧都法印定音（元中元年八月六日寂）とす。此寺は往昔修驗にて此傍の崖下に在りしが。後にこゝに移せり。眞言宗に屬せしは其の時ならむといふ。

墓域に「延元三年十月七日」「應安三年」「貞治□年九月」と記せし古碑あり。今存するや否。

●二子の渡

二子の渡は大山街道に當れる多摩川の渡津をいふ。玉川村大字瀨田より神奈川縣橘樹郡舊二子村に達するを以て此名あり行善寺前通りの阪を西に下り。少しく南に折れて。六鄕用水に架したる調布橋を渡り。西行すれば津頭に到る。渡船あり人馬を渡す。凡そ多摩川の幅は濶き處は八町貳拾間もあれど。此渡船場は平素は一町許に過ぎず。又此邊は水稍深けれど。二三町前後は膝を沒せざる處あれば。徒渉することを得べし。船を離れば磊々たる石を踏み。數町の間河原を行ざるべからず。天保元年庚寅林梧南秋夕の光景を記してり。

歷長尾、久地二村二達二驛子津一。野草間花夾レ路狼藉。金鐘兒聲鏗錚續奏。日已夕矣。煙氣搖曳。但見負レ薪而謳者。貫レ魚而歸者。疲馬嘶レ風。行旅呼レ艇。然秋江晚渡一畫幀也餘霞涵二水面一。落日冷二平原一。雁下白蘆渚。舟歸黃葉村。間遊憐二暮景一。久竚役二吟魂一。指點曾遊寺。喬松映二小軒一。

其の實景見るが如し。曾遊寺とは卽ち行善寺なり。

幕府時代は減水の節は假橋を架したりと見え。調布日記「二子のはたしの柴橋を渡り」とあり。江戸名所圖會の圖にも假橋を二ヶ所畫きあり。

河原は河面にて水流以下の地をいふ。多摩川の如き暴雨洪水の際河原は盡く水面となり。或は洪水後水路の變ずることあるも。尋常河原は水路より數倍濶く。其の間到る處石ならざるは莫し。且つ小形の者多きを以て之を掘り取り。道途に敷くの料に供す。稱して多摩川砂利といふ。昔時より絕えず掘り取るも減少するを見ず。所謂無盡藏なる者が。

多摩川の石は名物なれば擇びて拾ひ來るものあり。石の間には河原蓬など生しあり。

四方の道草に云。この川の鮎とりにこし時の面影に跡たとらばやと。川原に遊ぶ。もとこし時は　日のたそがれに著たれば。あし荻の中を少し行くと思ひしに。今日眞晝にみれば。向ひもこなたも川原ひろく見渡され。さまゞの石あるを。かなたこなたにて二三四五ひろひてふところに入す。又川原の所々に小さき草あり。何てふ草とも辨へかたければ。つみてよくゝみれば蓬といふもの也けり。川風に吹れ日にてらされてたちものひず。ことさまに見へしはいたふやつれかじけてゐのが常の姿を失ふにぞありける。託するところあしければ草も人もかくぞと感ず。又翁草といふがあり。花も葉も眞白にて。けにもその名さへしるく見ゆるも。ゐのが老によそへて憐ふかし。石川の何かしが老の涙そふかけもはつかしとよみしはむへ也けり。中略

玉川の清きながれに影みれば
　老のなみそふ我もはづかし

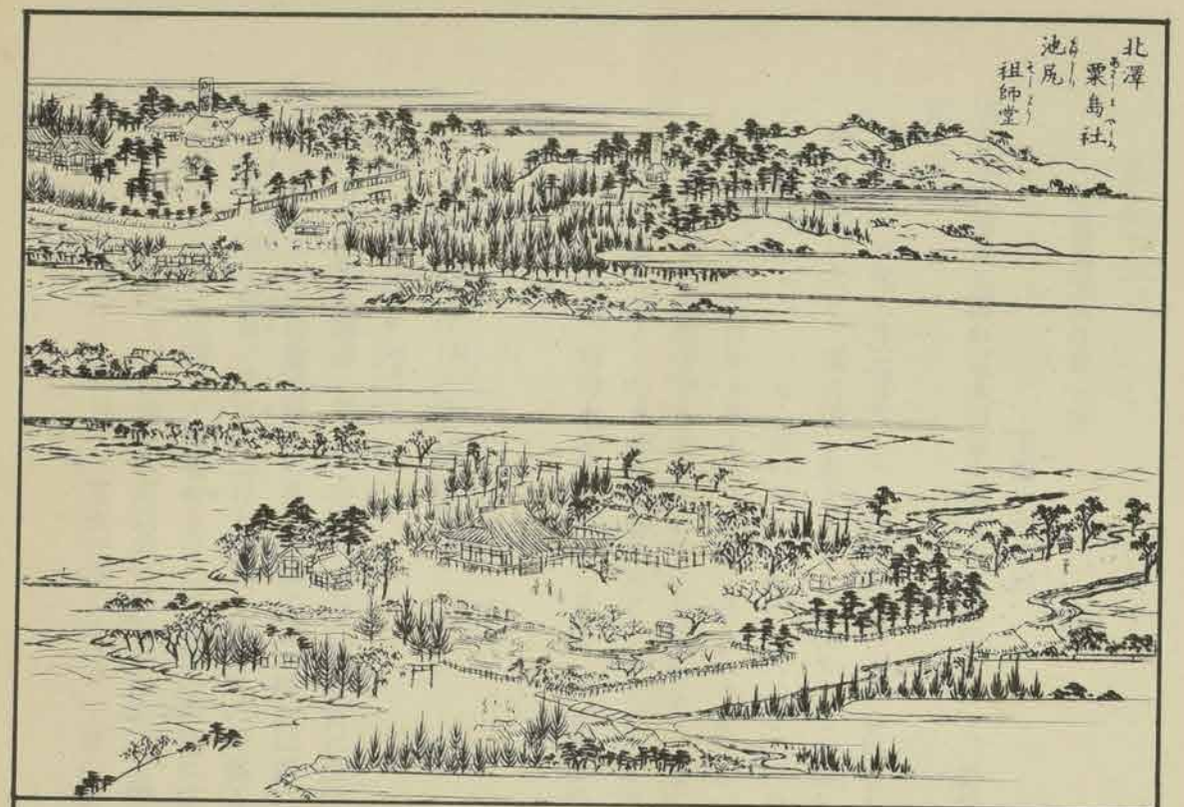
などあとさきはかぬ言葉も。たれ聞人なければ心やすし。此河原は皆に濶きのみならず。南北に遠く連り居れば。男子の閒游には適處なりといふべし。

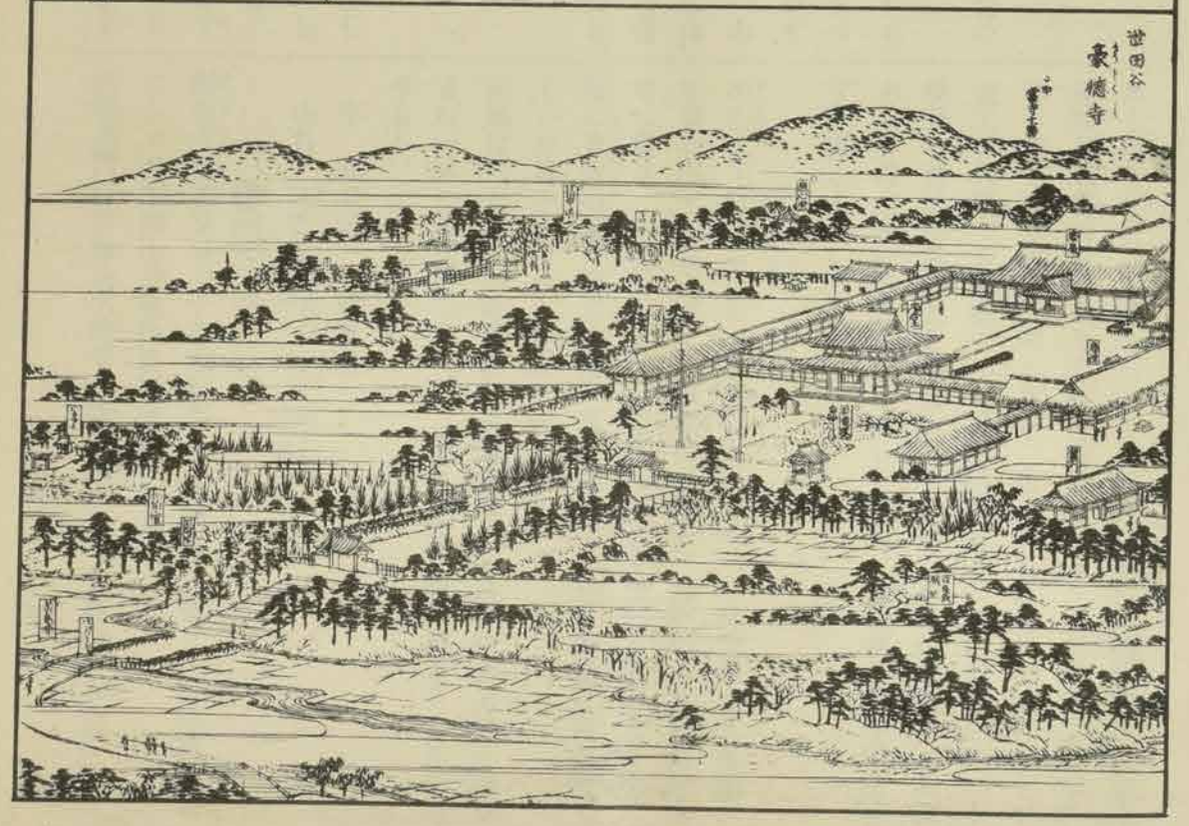
●二子東岸の旗亭

多摩川の東岡卽ち行善寺の方面より下瞰すれば。川岸に沿ふて幾處か銘旗の竿頭に翩々たるを認むべし。是れ近來鮎漁客の爲めに設けたるものにて。近く接すれば「鮎漁宿、御料理旅館、入浴御隨意など掲示しあるを見る。最も大なるを

柳家　喜久家　玉泉亭

とす。其の他月の家、中島や、富玉軒、見晴や等十數軒あり或は「玉川鮎ずし」と貼り出せるもあり。屋根を附せし小船に紅白の幕を繞したるもの多く岸に繫ぐ。是れ問はずして鮎漁船たるを知る。若し其れ一日の清遊を試みむと欲する者は玉川電車に乘りて此地に來り。直ちに旗亭に投じ。一浴一酌





後徐ろに船に駕し。漁夫に命じ網して以て香魚を獲。之を下物と爲して親友と適意に盃を擧げば。其の興いふべからず。我が青年時代には西岸に一個の亀屋あるのみにて。東岸には人家なかりしが。今や此の如く消夏の好地となりぬ。蓋し時勢の變遷に因ると雖も。亦都人士の奢侈に傾けるを徵すべし。

（。水清し算へても見る鮎の數）

●多摩川の香魚

多摩川古は調布を以て聞ゆ。香魚に至りて聞く所なし。延喜式貢魚に押年魚、鮮年魚等あれど武藏の名なし。香魚を以て此川の名產とするは後世のことゝ知らる。

續江戸砂子江府名產の條に。始て「多摩川鮎」と見ゆ。江戸名所圖會に至り。「鮎を以て此川の名產とす。故に初夏の頃より晩秋の頃迄。都下の人遠きを厭はずしてこゝに遊獵せりと明記す。十一代將軍德川家齊公など此地に啓行して捕魚を觀られしといふ。

捕魚の法には種々あれども。此邊にて普通に行はるゝは打網と垂釣なり。解禁期は毎年六月一日なれば。是より何人も遊漁を爲すを得べし。

今左に明治十年內國勸業博覽會出品解說に揭くる所を載せて此地の香魚を紹介すべし。

香魚　荏原郡瀨田村多摩川產　長崎長十郎

香魚は多摩川の名產なり。其頭小く肉厚く。骨柔軟にして味殊に佳絕なり。（腹中にあるウルカは腹病に効ありといふ。但秋分前は砂を交ふ。秋分後は然らず）凡一月大寒中に卵生す。其質初甚軟弱にして。流水に堪へず避けて下流の淺水に止る。稍長して一寸許に至れば。上流に逆る。三月二寸許に至り。五月三寸許。而して七月までは腹に砂多く。八月卵鮞白色となる。但し猶砂あり。九月卵黃色を帶ぶるに至れば腹砂を交へず。十月より十一月の間。砂石に卵を遺し了りて。背に黑色を呈す。此を銹鮎といふ。漸く漂泊して下流に向ひ去る。卽十月より十一月の間なり。

●舊家長崎氏

前記香魚の出品者長崎長十郎は此地の舊家にしてもと里正なり。相傳ふ先祖は行善寺の開基長崎伊豫守行善入道なりと。又慈眼寺の開基長崎四郎左衛門某をも此家の祖なりと云ふ。行善入道は小田原北條家へ仕へて功ありしかば。世田ヶ谷の內瀨田村の城主となり。其の子を隱岐守重高といふ。永祿の頃の人なりと。中葉諸城主に武藏國世田の城主長崎伊豫、同く隱岐重高、同く四郎兵衛重次と載たり。今其の城跡を傳へず。又同じ頃土佐守と云者あり。長崎次郎と稱せしもあり。其の親族にや。已に長崎土佐守としるせし文書を藏む。天正十八年北條家沒落せしかば。其のまゝに土着し。世々此地に住すといふ。土佐守宛の文書は左の如し。

今般御籠城之內日夜懸引於二方々一抽走廻條神妙思召狀

如レ件

永祿四年三月廿一日　　長崎土佐守殿　　花押

調布日記附錄に據れば太田蜀山翁も此家に宿したり。當時の記に云。

廿一日（文化六年三月なり）云々下野毛村より船にのりて瀬田村にいたり。新に築し堤をみる。蛇籠などたてならべて修理なしたり。一むら杉のたてる門べに大きなるけやきの木高き四五丈ばかりなるが。青葉の枝さしかはせり。あるしは四郎右衛門といへる里正にして長崎氏なり。家に傳へし小田原北條よりたまはれる感狀あり」云々。此家書畫を嗜むとみえて。掛物あまたとりいで見す。中々旅の心をなぐさむ。

○武藏野の月の宿とや千駄茅

◉千駄ケ谷町

千駄ヶ谷町は豐多摩郡に屬し。赤阪四谷兩市區の西に接續し南は澁谷町に北は内藤新宿町に界し。西は代々幡村に隣れり。もと千駄ヶ谷、穩田、原宿の三村を併合したるものに係る。千駄ヶ谷は正保改定圖に千駄萱村と記し。延寶の水帳には千駄之萱村と載せたり。相傳ふ天正以前は民戸僅かに二三煙にて茫々と萱のみ多く生し居り。寛永の頃には日々千駄の萱を苅り取りしを以て此名ありと。然れども北條役帳に已に島津孫四郎八貫六百四十文千駄ヶ谷とあれば。其の以前より今の如く書したることは明かなり。蓋し地名は其の文字によりて直ちに判斷するを得ず。之を駒込千駄木の例に照らせば。千駄萱の說或は其の實を得たるにや。彼の聖輪寺の如き古刹等あるの外大部は原なりしならむ。原宿、權太原の稱今尙ほ存す。證とすべし。

◎原宿

原宿は千駄ヶ谷町に屬し其の大字たり。北條役帳に島津衆太田新次郎十一貫七百文江戸原宿と載す。傳へいふ往昔奥州街道に當り。宿驛のありし處なりと。今の霞ヶ岳町舊神明社前に東隄の跡と稱する地。青山御所構内にも奥州街道の並木といひ傳ふるものあれば。或は然らむ。

此地は天正年間明屋敷番伊賀衆に賜りし大繩給地七村の一なるが。其の後正德三年文化二年に幕府の直轄地となりたる所もあり。

字　北原宿　南原宿

小名　灰毛丸（澁谷川の西）　石田（同上灰毛丸の南）

●龍岩寺

龍岩寺は北原宿七十番地に在り。古碧山と號す。禪宗臨濟派にして多摩郡由井領山田村廣園寺の末なり。

新築黑門前に弘法大師第九番靈場の石標を建つ。本堂は南に

面し。大師堂は東に向ふ。

相傳ふ境内昔は名主半右衛門の宅地にて。辨財天社あり。傍に小庵を設け。喚室といへる僧をして住せしめしが。慶長七年遂に宅を捨て寺とす。因て喚室を開山と爲すと。喚室は元和八年十一月二十四日寂す。或はいふ天正十八年以前より在りし寺なりと。

○松あらは坐らむものを今日の月

當寺には昔時圓座松と稱する名松ありしが。枯たるにや今はなし。俗に傘松といへり。其の圖は載せて江戸名所圖會に在り。圍み四尺許。根の上一尺許を隔てゝ四方に蟠延す。大さ東西七間餘。南北六間半。其の狀圓座を敷きたるものゝ如し故に此名あり。東都一覽武藏考に。庭に圓座松と云あり。根より僅數尺にして偃蓋十餘間にあまる。奇樹と云べしと見ゆ此松は當寺の呼物にて此松の爲めに來るもの多かりしが。之を失ひしは惜むべき事なり。

●慈光寺

慈光寺は同所七十二番地に在り。青野山と號す。眞宗大谷派なり。開山知鏡は三河國青野村慈光寺の住僧にて。江戸に來り。元和元年赤坂一ッ木町に當寺を開創す。後ち町内小名大澤町に移り。元祿八年又こゝに轉せり。

●長安寺

長安寺は百六十一番地に在り。大實山と號し龍泉院と稱す。原宿の西横丁にて。赤色門の精舍なり。

淨土宗にして京都智恩院の末。開山は品譽長悅。慶長四年三月十日寂す。

當寺には大和國矢田寺滿米上人作の滿米地藏。及び小野篁作と稱する燒閻摩（燒け跡あり）を安置しあり。

●勢揃阪

勢揃阪は龍岩寺の小阪をいふ。龍岩寺の傳說に云。往昔源義家奥州下向の時。澁谷城に滯留し。當所にて軍勢到著せしより此名ありと。龍岩寺は古き寺にもあらざるに此傳說あるは素より信じ難しと雖も。奥州街道たりしことは信ずべし。

●田原藤太の山車

原宿にて名高きは田原藤太秀卿と龍宮乙姫の山車人形にて。熊野神社祭禮の日に之を飾り立るを例とす。山車にて曳出したることは稀なり。編者の幼時毎年行て觀たり。今尚ほ存す

●原宿停車場

原宿停車場は南豐島御料地外代々木練兵場の東に在り。山手線の一驛にして。新宿驛と澁谷驛の中間に當れり。飛行機試揚の際は常に雜沓す。他日觀兵式を代々木練兵場に於て實行せらるゝに至れば。此驛は拜覽者樞要の昇降場たり。

◎穩田

穩田はもと村名なりしが。今は千駄ヶ谷町に屬し其の大字たり。位置は原宿の西に連りて澁谷川を挾み。山手官鐵線に界す。其の沿革は原宿に同じ。

舊小名　道前　庚申塚　大原耕地　前耕地　源氏山耕地
赤羽根耕地

今の小名　竹下北方　源氏山竹下の高地の上　大原源氏山の南
前田竹下の東南　赤羽根大山邸の邊

○穩田はもと田圃なり

穩田は其の名の如くもと田圃にてありし。編者の幼時は「穩田田圃に遊びに行かむ」とて泥鰌小魚など掬びに來りしものなり。芹、嫁菜、紫雲英など採りしは近年のやうに覺しがいつしかお仲團子より南方澁谷に至るの間家つゞきとなり。全く舊觀を一變せしは驚くに堪へたり。「我事と泥鰌のにげし根芹哉」の句も吟ずる處なきに至れり。

●桃太郎主義の幼稚園

穩田四番地卽ち南原宿裏通りにお伽倶部附屬私立早蕨幼稚園あり。私立少年圖書館亦こゝに在り。久留島武彥氏の家なり玄關に桃太郎主義と扁す。甚だ面白し。若し我が少年をして悉く此主義たらしめは。他日鬼島なる外國を征服するを得べし。久留島氏は夫れ日本一の黍團子を作りて與ふる者か。

●名士の邸宅

穩田には名士の邸宅多し。其の中大山、淺野、高崎、土屋の諸邸は人の皆知る所なり。

●穩田橋　飴屋橋

穩田橋は大山邸に沿ふて西に下り大原に行く途次。澁谷川に架する橋梁をいふ。

飴屋橋は源氏山の東千駄ヶ谷より澁谷に通ずる往還に横はれる渠水に渡す小石橋といふ。もと此處に飴屋ありしより此名あるにや。但明治以前より橋南に一軒の草屋ありて物を鬻き居りしも飴屋にてはなかりし。

○此井戸に植べき花や杜若

●紫の井

紫の井は飴屋橋の南方右側の空地に在り。清泉常に涌出す。昔時此邊は松平安藝守夫人の地子屋敷たりし時鑿りし井なり石幹に延寶二甲寅年五月十四日涌泉とあり。

此井の南西に飛泉あり。高崖より凹地に灑ぐ。今は荒廢して纔かに其の跡を留む。

明治十四五年の頃は。此庭園に茶店あり。夏日は遊客をして飛泉に澡浴せしめたり。

上澁谷長泉寺の觀音堂に瀧見堂の稱あるは。往昔此處に在りしに因ると云。

●源氏山

源氏山は飴屋橋より西に上りし高地をいふ。南に片岡七郎氏北に太田資時氏等の邸あり。此路は代々木練兵場東入口に通ず源氏山の地名は源義家などに關係あるものゝ如し。然れども之を記載せしものあるを見ず。惜むべし。

◎千駄ヶ谷

千駄ヶ谷は町名の因て起る所にして。其の大字たり。青山練兵場の西に在りて。北方は新宿御苑に沿ひ。西方は山手官鐵線を界として代々幡村に對し。南方は町内の原宿、穩田を擁せり。澁谷川其の東端を劃し。中央東線卽ち新宿方面より昌平橋に通ずる鐵路其の北部を貫く。

大番町並に今の霞岳町はもと千駄ヶ谷の部分なりしが。今は四谷區に屬せり。但信濃町と共に八幡神社の氏子たることは依然たり。

舊小名　千駄ヶ谷町（武家屋敷の間處々に散在す）　神明門前（今の霞岳町の一隅）　大番町　瑞圓寺門前　聖輪寺門前　新町　北脇　川向　下道　南前

今の小名　内藤田圃（千駄ヶ谷停車場の西）　北脇（内藤田圃の南方）　中村（仙壽院の邊）　八幡前（八幡神社の前通）　水口（仙壽院の西）　大通（德川邸西門の先通り）　宮下（八幡神社の西）　新屋敷（新宿御苑の西裏）　厩通（新屋敷の北）　下道（大通りの北隅の南）　小西（下道の南蹈切の邊）

（○蜩にむかしを懷ふ人もかな）

●新日暮里　仙壽院

新日暮里とは仙壽院庭園の舊稱なり。林泉の風趣谷中日暮里に似たればとて。假に此稱を附したり。文政天保の頃。春の彌生花の爛熟たる候には。遊人群集して大に賑はひしといふ。編者の幼時常に此庭園に遊びしを以て其の林泉を記憶せり。

此時は既に文政天保の繁華は一掃せりと雖も。尙ほ林泉を存せしに因り。こゝに遊杖を寄する者尠からざりし。蕉翁の句碑ある老椎の側に園門あり。門内は一帶の丘陵にて園の全部及び園外の水田を俯瞰す。丘下に池あり。中嶼を設く。橋を踏みて到るべし。江戸名所圖會に其の圖を載せあれば參看するを要す。明治以後荒廢し居りしが。遂に毀ちて宅地と爲し。家屋を新築したり。今日にては既に新日暮里の名さへ知る者稀なり。

東都一覽武藏考に仙壽院云々。庭つくり巧をきはめて櫻樹殊に多く。花の頃は遊觀の人多し。新堀村修性院妙性院の庭佳景なるに對し。こゝをば世に新日くらしと云」と見ゆ。證とすべし。

仙壽院は法雲山と號す。日蓮宗にして甲斐國大野本遠寺の末なり。正保元年甲申紀伊侯の母堂養珠院日心大姉の創立する所。鬼子母神は同大姉身延山にて靈示を感じ。大野の邊の土中より得たるものにして。當寺落成の日安置せしといふ。門は瓦葺素木造りにて澁谷川に對す。門前に當山鎭守鬼子母神の石標あり。寛保元辛酉歲五月建る所。門には毎月八日午前祈禱午後說敎と標示す。門内石路の左右に茶、櫻、楓を植石階七級の上に中門あり。法雲山の金字額を揭ぐ。本堂等の舊建築物は十數年前燒失して。現在のものは其の後に建しものに係る。其の制舊に比すべくもあらず。鬼子母神堂は今に

至りて再築成らず。

堂の東南に二圍餘の老松あり。其の枝左右に張ること六七間。其の風姿觀るべし。

●お仲團子

お仲團子は茶店の名にして。小名中村に在り。澁谷川に臨み。青山に至る道と穩田に至る道の角に當る。新日暮里隆盛の頃お仲といへる婦人の賣り出せる團子店にて。當時評判なりしより。今日尙ほ其の名を存ず。暖簾に古代團子お仲とあり。店側に左の碑を建つ。

紀念道志留邊　ひたりは第十番の　しやうりんじ　はしのむかふは第九番の　りうがんじ

此茶店は大師巡拜の者多く休憩するより此碑を設けしならむ。此邊にては名代の團子店なり。

●千駄ヶ谷停車場

千駄ヶ谷停車場は大字千駄ヶ谷小名内藤田圃の東卽ち四谷大番町より德川邸に達する途次に在り。中央東線の一驛にして信濃町驛と代々木驛との中間に位す。大博覽會の連絡通路其の傍に當れり。

●順正寺

順正寺は大字千駄谷三百五十九番地に在り。卽ち青山練兵場西口より霞岳町を歷て。澁谷川の西岸なりとす。高柳山と號し。眞宗本願寺派に屬す。門に山號の艸字額を扁す。林孟高の筆に係る。門内鐘樓あり又新に菩提樹を植たるを見る。堂前に松樹二株あり。編者幼時見る所に同じ。毎月二日。十六日法話を爲す。

●聖輪寺　增譽法印墓

聖輪寺は淺草寺に亞げる府内の古刹にして。千駄ヶ谷百六十番地に在り。石階六級の上に門あり。門前「府内八十八ヶ所第十番弘法大師」等の石標を建つ。門内正面は觀音堂にて東に向ふ。堂前に石燈籠二基を存す。元祿十五年壬午六月十八日青山下野家中の寄進する所なり。

本尊如意輪觀世音は行基大士の彫刻にして高三尺五寸。世俗之を目玉の觀音と呼ぶ。傳へいふ。慶長三年の春盜賊來り。本尊の双眼は精金なるよしを聞き。穿ち取りて去らむとせしが。冥罰にや自から其の刃に貫かれて死す。此地の高橋某之を目擊して驚嘆し。堂宇を再興せりと。因て此稱あり。もとの堂は今の堂の側より石階數十級を上りたる高地に在りたり此處今は過半新道並に宅地となれり。昔時觀音堂の屋上に實生せしものと傳ふる老櫻は。今僅かに崖上に殘姿を留む。弘法大師堂は南面す。阿波國切幡寺の模しなり。正五九月大護摩を修行し。毎月十七十八日の佛敎法話會あり。

有名なる增譽法師の墓は。後岡墓域に在り。三尺許の五輪の塔にて。

當山第三世元法印增譽

と刻す。墓所一覽を閲するに。

增譽法印俗姓眞田氏。四谷千駄茅聖輪寺住持也。
蓋在俗之日以甲陽古傳軍術教授生徒。允從游者
夥矣。行餘著明良洪範。寶永四年七月二日化。葬
其所。近曾有山本氏者修造其塔。

とあり。墓表に第三世と刻したるは中興開山法印權大僧都祐仙(元祿七年五月朔日寂)より算せしものならむ。

抑々當時は觀谷山と號す。眞言宗にして大和國長谷寺の末なり。開山は行基大士なり。都下にて千餘歲に及ぶ古刹は淺草寺と此寺なりといひ傳ふ。

緣起云。神龜二年乙丑行基大士東國遊化の頃。同年初夏暫く此地に息ひ給ふ時に。如意輪觀世音傍の谷より出現し給ひ。靈示あり。因て佛意に應じ。かしこにありし古株を佛材として此本尊を彫刻し奉る。故に觀谷聖輪の號ありといへり。

●新　道

聖輪寺前より小名八幡前に直通する道路は。十數年前新に開きたるものに係る。今其の南瑞圓寺前に在るもの舊道なり。

●瑞　圓　寺

瑞圓寺は聖輪寺の南西舊道の南側に在り。眞言宗にして高雲山と號す。八幡神社の舊別當寺なり。

本堂は瓦葺素木造りにて明治四十二年の再築に係る。墓域に故一橋府儒員盅齊先生久保仲通墓あり。柴栗山先生が寛政三年十月の撰文を刻す。

○出來秋に神樂の音も豐かなり

●八幡神社

○現況

八幡神社は瑞圓寺の西一丁許の處に在り。門前に松樹二株を双植す。昔時一老松あり。鈴懸松と稱す。寛永年間將軍德川家光此地放鷹の際。其の鷹の鈴松梢にかゝりし故に名く。今の兩松は其の記念なりと知らる。傍に警視廳の制札を建つ。兩柱石門內一帶の甃路社殿に通す。石の鳥居あり。高一丈三尺横一丈一尺。八幡神社の石額を掲く。北に椎の老樹あり。南に神樂殿を設く。天井に八方睥睨の蟠龍を圖す。大岡雲峯の畫く所。此神樂殿はもと北方富士築山の前面に在りしを昨年こゝに移したるものなり。其の西に諏訪神社あり。幕府時代は聖輪寺舊觀音堂の南に在りたるものに係る。編者幼時親しく之を目擊す。甃路を夾みて石狛一双を置く。「維時文化十一龍次申戌晩秋九月穀旦別當高雲山月船代」と刻す。北畔に水屋あり。盥石には「恭奠潔水盥、文政三庚辰歲三月朔、權田原三筋町中」と銘せり。石幹露井の西に大さ三圍の銀杏樹聳立す。次に石燈籠兩基を配す。是には寶曆四申戊歲十一月吉日

とあり。社前に鐵製貯水盤を双置す。新屋鋪、長延寺門前家主等の文字を認む。

正面は社殿にて向拜に飛龍の浮彫あり。拜殿は素木、破風、二重垂木、開戸半蔀、廻欄、格天井にて。前面に八幡宮の金字大額を掲く。幣殿、本社其の後に連る。

境內三千三百五坪。北東に岩石を以て築きたる山あり。中腹に富士淺間社を鎭す。山前に空地を設け石梁を架す。石の鳥居には「四谷鮫橋赤阪元講」とあり。石狛には「享保二十乙卯九月吉日」と刻したり。丁亥(文政十年)書上に

富士淺間築山　祭禮六月三日

右起立之儀は天正年間と有之候得共確と相知不申
候先年祠有之候處去酉年燒失仕候尤未再建不仕候
神體は富士山形之石に御座候

と見ゆ。恐らくは天正にてはあらざるべし。其の後に築きしものと信ぜらる。四方の道草に「こは安永の末に築きしと覺ゆ」とあり。さもあるべし。山上に赤樫あり。老樹名鑑に高四丈三百年と記す。蓋し推測なり。

北畔に天白稻荷神社、菅原神社、天祖神社等の支社あり。此天祖神社はもと神明宮と稱し。青山練兵場の西老銀杏の傍に在りしを昨年移したるものなり。境內北西に左の碑あり。

○筆塚　元治元甲子年五月松仙堂門人建之

○俳句碑　無人の數に入りてや茶の木咲く

○高輪靈神石碑　乙卯大呂　鷹一□

背面に左の如く鐫す。

元祿十四年辛巳年二月六日生
明和八辛卯年正月八日卒　攝州高槻家臣
海北半兵衛源宗胤

其の他道壽靈、秀福靈、茂辰靈と並刻したる小碑もあり、是はもと天祖神社の舊地林間に在りしものなり。

○舊　況

當社境內には昔時水茶屋あり。芝居あり。揚弓場ありて甚だ繁昌を極めたりといふ。今人或は聞て以て虛談と爲さむ。乃ち其の證を揭げて舊事を傳ふ。丁亥書上に云。

定水茶屋六軒

右水茶屋起立之儀は寶永七庚寅年鳥居伊賀守殿寺社御役中御免許罷成候得共當時は一軒罷在候
定芝居之儀者元文五申年中本多紀伊守殿寺社御役中御願申上候處山名周防守殿御內寄合於御列席願之通御免被仰付候其後七十五坪願濟罷成候處延享二丑年二月十二日類燒仕候而未家作不仕候に付寛政十一未年中松平周防守殿芝居水茶屋兩樣とも再興願申上置候得共追而及沙汰由被仰付其後御沙汰無之に付よし
す張葭簀屋根にて二間に二間之水茶屋五ヶ所子供踊場
十九間に九間に而日數七十日日延合百日之間渡世筋之

もの共時々寺社御用番江相願當時興行罷在候楊弓場之義ハ正德五乙未年願濟相成候得共酉年類燒仕末家作渡世不レ仕候

此書上に據れば丁亥卽ち文政十年には水茶屋五ヶ所幷に小供踊場の名を以て建設したる芝居一ヶ所ありしこと明かなり。楊弓場等は其の後再興せしや否詳かならず。右の水茶屋芝居は水野越前守が天保の改革に際し。廢撤せられしものと知らる。

又西北隅に長五十間幅五間の馬場ありたり。武家方稽古場とあれば。附近に住する諸士の調馬を試みし所なるべし。其の他境内の圖に供所跡、馬屋、賣藥見世跡などしるしあるを見れば。其のものありしことゝ信ぜらる。

○由來

當社は鳩ノ森と稱し。又廣幡と號す。鳩ノ森の稱は舊社記に載する所にして。現今尙ほ之を用ふ。廣幡の號は益池直博の筆記に見ゆ。文政三庚辰年四月二十日鎭守廣幡八幡大神宮開帳有之に付奉納三十六座御神樂次第とある條に。祝詞を載せたり。其の中にも武藏國豐島郡千駄谷邑乃下都磐根爾宮柱太立高天之原爾千木高知氐鎭座須廣幡八幡大神云々とあり。證とすべし。創立年月詳かならず。舊社記には貞觀二年と載せ。丁亥書上には神龜年間勸請之由申傳候得共詳なる儀相知不申候と記す。共に信じ難し。

江戸名所圖會に社記を揭げて云。往昔此地深林の中に時として瑞雲現しける。又或時碧空より白氣降りて雲上に散す。村民怪むて彼林の下に至るに。忽然として白鳩數多西をさして飛されり。依て其靈瑞を稱し小祠を營み。名つけて鳩森といふ。貞觀二年慈覺大師東國遊化の頃。村民等大師に鳩森の神體を乞求む。依て宇佐八幡宮城州鳩の嶺に移り給ふ古を思ひて。神功皇后、應神天皇、春日明神等の尊體を作り添へて正八幡宮と崇め給ふ。遙に後久壽年間澁谷正俊領地に鎭座の御神なるを以て金王丸生前隨身の本尊惠心僧都作の彌陀如來の像を本地佛とし。社を造營して此地の生土神と稱し奉りしより靈應は昭々として日に新なり。」

其の杜撰なること辯を待ずして明かなりとす。久壽年間澁谷正俊などあるは殊に甚しと爲す。宜しく金王八幡神社の條を參看すべし。

別に萬治三年に記したる緣起あり。丁亥書上に之を載す。前記の社記に比すれば。更に不可思議なるものなり。

江府豐島郡澁谷庄千駄箇谷總鎭守鳩森正八幡宮緣起

原るに當社正八幡宮御體應神天皇は聖德太子十六歲の御時守屋退治の爲め譽田八幡宮へ一七日の間參籠有レ之。靈夢を蒙り給ふ。依て守屋退治の後。靈夢に相見し奉る所の御姿を自ら彫刻し給ふ處の御神體なり。抑千駄ヶ谷の宗廟にして氏子尤多し。辱も正八幡宮は源家一統の守護神にして。

昇平武運長久日に守護し給ふ。信心の輩は軍旅の秘術弓馬の道役を蒙る。凡詣來丹心の男女祈誓念願として滿足せずといふ事なし。爰に中古澁谷金王丸といふ者あり。或時大軍に臨て命全く危し。暫く當社八幡宮を祈念すれば。戰場忽ち飄てつひに命全して陣に歸ることを得たり。直に御禮の爲め且は明日の軍勝利あらんことを祈願せんと。當社へ詣來して三拜九拜する時。夜まさに丑みつの頃なりしが。不思議なるかな拜殿俄に震動し。宮中しきりと神馬嘶きくつはの音高く響きたり。難有奇異の思ひをなし。扨は祈願感應あることを知り。明日の軍勝利疑なしと天へも登る心地して。又三拜九拜して陣に歸らんとする時。鳥居の內に物あり。燭を照して之を見れば一筋の神箭なり。是れ全く八幡の授け給ふ所の物なりと。謹で頂戴し陣に歸る。翌日果して右の神箭にて大軍を射破ると微塵の如し。誠に神慮の惠至れる哉。而后武功によりて澁谷七ヶ莊を管領す因て生涯隨身の守本尊惠心僧都の作一寸八分の彌陀如來を奉納して當社の本地佛とす且拾ひ得る所の神箭外に百筋の箭を添て返し奉る。今漸く授け給ふ御箭の根計り存して當山第一の靈寶とす。譬ば仁和二年四月十四日に菅丞相譽田八幡宮へ參籠の時。神童社壇より現れ出寶劍を授け給ふとあり其寶劍今に筑紫の安樂寺に傳へあるが如し。其後金王丸沒後陵を澁谷に祭る時當社を勸請すと云々。爾來遠近閭巷の群品當社へ歸敬して神慮を得るもの甚多し。御當家よりも御朱印御寄付ありてより。神光益輝き神慮いちじるし。委しき事は本緣起にあり。

維時萬治三庚子年九月

此緣起は當時浮屠氏の手に成りしもの故。其の書法散漫にして一切年月を記せず。聖德太子彫刻の像としたること先づ其の本色を暴露したるものといふべし。是にては何に因て其の像のこゝにあるや疑はしきを以て前記の社記には慈覺の此地にて作りし事に改めたるものと見ゆ。金王丸が此附近にて大戰を爲したるが如く書せしは。荒唐無稽も極れり。此の如へ亂筆を弄せしは。實に神威を汚すものなり。編者此の神社にして其の傳の正確を失したるを嘆息す。

○大祭日と氏子町

大祭日は毎年九月二十七日なり。丁亥書上に祭禮例年九月二十七日。尤八月十五日之所。八幡宮御供新米熟兼候に付。幸當所安置之諏訪明神同日に相延候由申傳候とあり。

同書上に氏子町名を擧げたり。

千駄ヶ谷　大番町　甲賀町（今は靑山練兵場內に屬す）
權田原　右京町　信濃殿町（今の信濃町）
內藤宿　新町　裏大番町（今の大番町三十五番地
以下の一帶をいふ）

右の中內藤新宿、新町とあるは。今の新屋鋪にありし內藤新

宿六軒町並に新町通りのことにや。今は霞岳町。内藤町等の町名新に加りたり。

●八幡前の景況

八幡前は千駄ヶ谷町の小名にして八幡神社の前通りをいふ。幕府時代は社前なる町の角に立場茶屋ありたり。瀧見屋と稱す。力士瀧見山の家なりと聞きぬ。南側は水野日向守の屋鋪。又神社表門の北には酒鋪あり。今存在す。社境の北鄰は植木屋にて茶店を兼業し繁昌し居れり。お辨の茶屋と稱す。お辨といへる婦人がうり出したるに因る。堀内歸りの客は多く此に立寄れり。今は境内北東隅に千駄谷小學校其の前通り新道の角に新築の千駄谷町役場ありて。傍に明治三十七八年役記念碑を建つ。陸軍中將比志島義輝書と刻す。忠勇義烈の題字は大山元帥の筆なり。其の東北に當れる大宅は。卽ち貴族院議長德川公爵の本邸なりとす。此邊未だ繁華ならざれども。代々木御料地に通ずる大博覽會の交通路其の北に接近し居れば。漸次殷盛の域に達すべし。

●新屋敷

新屋敷は鐵道中央東線の北に在り。昔時は武家屋敷にして。幕府旗下の士多く居住せり。今の新宿御苑卽ち内藤大和守中屋敷外の畑地に沿へる小路の外。南北に通ずる四條の道ありたり。東側の第一を大名小路、次を六軒町通り、次を中丁通り、次を新町通りと唱へ。辻番所處々に在りし。嘉永二年改版の四谷千駄谷内藤新宿邊繪圖に照して之を知るべし。慶應の頃此新屋敷に樋口次郎、興津金八などいふ講武所の擊劍家ありて酒井の邏兵と衝突して之を斬り。後ち兩人とも同じく殺さるゝに至れり。

●水口の陰榎

八幡神社の前より南に入り少しく西に折れたる崖壁に榎あり。其の根半露して崖を掩ひ。其の狀女陰に似たる處あるより。近頃右里大明神など書せし小幟を建て參詣する者あるは一笑に堪たり。但從來此陰榎は有名にてありし。

◎澁谷町拾遺

○松崎慊堂先生の舊居

松崎慊堂先生の舊居は下澁谷羽澤今の桑原氏の邸地なりといふ。近頃まで書房存せしよし。海野豫の撰せし先生の墓表に弘化甲辰歳四月廿一日致仕掛川教授慊堂先生以レ疾歿レ於二江戸城西羽澤之山房一春秋七十有四とあれば。此處は先生終焉の地なり。先生が花信小引の文に「春雨方霽。庭草之翠可レ掬。茶三碗。煙數管。右二花史一左二吟譜一。松居士元二坐其中一悠然有レ入二花柳世界一籠二絡群芳一之志一など見れば幽雅の書房たりしや知るべし。又安井息軒翁が送二渡邊魯輔一序に益城松崎先生之下二築於羽皐一也。削二跡於城市一三十年。嘗刻レ印曰二林下一人一。欲二以益研一其所レ蘊。而才學之富志操之高。生徒影附。

前後學二其門一者數百千人とあり此地に卜居後も從學者の多かりしを證すべし。

○服部南郭先生の別業

服部南郭先生の別業は羽澤の内今の氷川裏によりたる處に在り今も其の子孫之を保有すといふ。感化院長高瀨眞卿翁の如き之を實見せしよしを聞けり。別業の號を白賁墅といへることは嘗て余が故友幸田思誠の語る所なりき。是は易に上九。白賁無レ咎とあるに取れるなり。南郭先生の本宅は芝赤羽なることは人の知る所なり。

○堀田相模守の舊邸

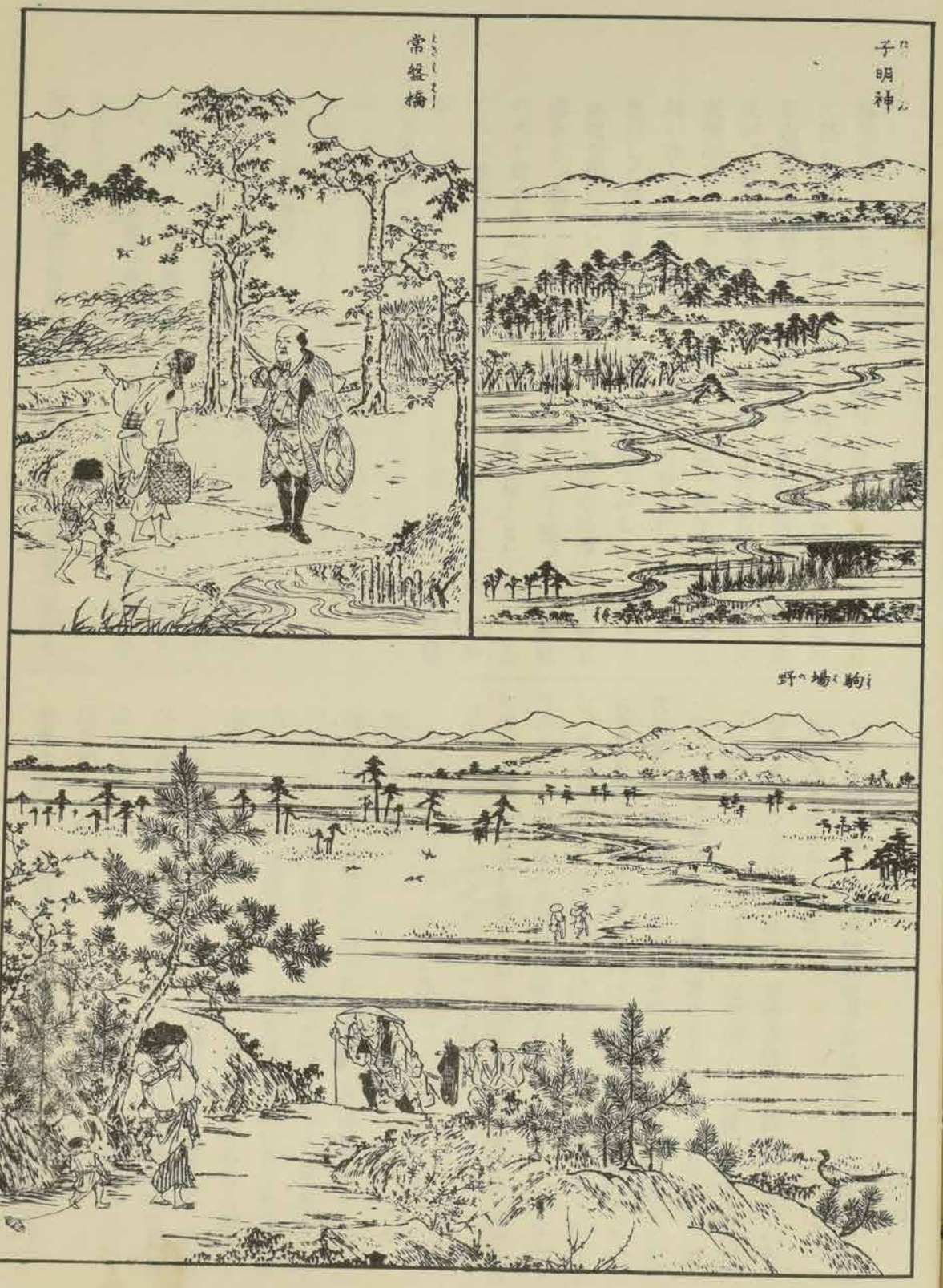
堀田相模守の舊邸は今の日本赤十字病院の地なり。さてこそ宗吾松などいふものあるなり。其の北は山口修理亮、其の西は仙石越前守の邸なりし。

○伊勢野の法如菴

今の伊勢山はもと伊勢野と稱し。大神宮のうしろに法如菴といふがありしよし。四方の道草文政二年八月の紀行に左の如くしるせり。

澁谷八幡宮の近くに伊勢野といふ所あり。そこに法如菴と云あり。こは本鄕圓滿寺の隱居所にて孔雀明王を祭ると云。野の見はらしよしとある人いへば。一日かしこを尋ねて行（中略）八幡宮の前の茶屋に休らひ伊勢野といふは何方と問ば。こゝの路の東に少しのほる所垣の内に木立あり。其木のもとにちいさき祠あるが伊勢大神宮にて。ふるくよりこゝに祝ひ奉るゆへそこを伊勢野とよぶ。法如菴は大神宮のたゝにうしろなりとあるしの女いふ。依てそこに行てみれば。初めはね澤よりこゝに來るとて。はたの細道を黑田殿の屋しきにそふてこし狐兎の徑のかたへにありしそれともみへぬ小祠ぞ。この大神宮にはおはしましける。祠は五六尺はかり。茅もてふけるも雨もらぬばかりにて。丸木の鳥居もとはかりの形のみ。みまへにかへりまふしして。祠のうしろに大なるぬりこめのきら〳〵と白土ぬりたるがあるにそふて。木の下かけを北にめくり出れは。法如菴の門のうちに出。菴はひろからぬも清らにすみなし。庭は前の畑を見おろし。はるか向ひに前のは禰澤の氷川の松の林を見。其こなたに内藤紀伊守殿のやしきの森をも望ひ。座敷のさま庭のつくりなし蒙駝翁のすみかとも見なさる。門は北に向ひはたを隔てゝ四五丁はかりに松平左京太夫殿のやしきのかたそばを見わたさる閑靜の境なれどさせる眺望もなし。祈禱たのまされはみたりに孔雀明王をは拜せしめすと云。

宮の御方よりも折〳〵女房してこゝに詣らせ給ふといふ。こゝを伊勢野とよふはふるくよりの名にて。この庵はもとよりありしにもあらし。さるをかしこくも皇太神宮の宮居をはおのが住坊の尻にして東南をおほひかくし。心のまゝ



にすみなしたるはいかにぞや神はおほやけにましませば
おひしけるあらぬ草をも其まゝに
伊勢のゝ原の神はへたてす
道のへの一むらすゝきかりそめに
いつより神の宮ねせるらん
たつねきて神のいかはきはいつこそと
問はこたふる萩の夕風

○再び金王櫻鎭座松に就て

前編に金王櫻の事を詳記し。江戸砂子、江戸名所圖會に記したる紀伊家養珠院が此櫻の實をうへ。花も咲べき頃になりし時社頭の親樹枯たれば。金王丸の子孫なりといふ澁谷善入をして之を再種せしめられし事を載せたるが。後ちに四方の道草を閲せしに。其の事の誤りなるよしを掲げあり。左の如し

紀藩の澁谷傳十郎にこの事を問しに。答て曰。藩の澁谷氏は己を始め本は丹波の波多野にて。藤原氏なり。故ありて澁谷を名のる。澁谷隱岐守、澁谷勘作、澁谷采女など一流にて同姓なり。相模の澁谷氏は秩父の一族にて平氏なり。養珠院殿より櫻の種をたひて澁谷八幡宮に栽させられしと云事一族の中に云つたへもなし。元よりかれは平氏。己が如きは藤原氏なり。澁谷を名乘といへども。その子孫にもあらぬに。養珠院殿よりこのやうの御事あるべくもなし。江戸砂子といふものにその事をのせたるは。あとかたもなき事をさりぬべきやうに書なしたるなるべし。往年松平大炊頭殿よりも此事御尋ありし時も。前の如く答へ參らせしと。文政五年壬午正月二日かたるまゝに書つく。

傳十郎の言は實なるが如し。崔下沾涼などもあらぬ事を作り設けて書きしにもあらざるべし。當時の傳說を其のまゝ記したるものと信せらる。世にはかゝる事多くあり。

八幡神社々司比留間彥作氏金王櫻と鎭座松の事蹟に就き。更に報道せられたれば。左に之を掲げて參拜者の談柄に供す。

紀州侯母堂の植られたる趣嘗て聞及びたる事なり。そも紀州侯の分家松平左京太夫邸(今の靑山學院の地)ありて。當社唯一の崇敬者氏子に有り之候。又隨て紀州家にも關係有り之て今も二三ヶ所葵の紋殘り居り候。又目下社務所の中部なる八疊の間は紀州公休憩の場所にして。其欄間の內部には雄麗の筆を以て和歌浦を畫せられ。外部には富岳に鶴の空中に雄飛するを圖せられたり。(右は昔侯の二番繪士がかゝれたりと云)夫れ然り御母堂の植させられしは。實に然る事にもありしならん。(尤事實なりしか或は兎に角に奉納せられしものにや)明治十一年彥作七歲の時父彥輔氏に屬して當社に從緣せしが。十一二年の頃二段步內外の所を村內の人開墾せしが。これぞ舊金王櫻公園のありし地なるかも。さて其頃目下社の左方なる一老櫻樹現在し。蕉翁の句碑を存せしが。數年の後村內の人集りて假字の碑と若樹の八重

櫻と「チヤボヒバ」の木（三種目下現存）を此老櫻の左右に移し置かれたるになんある。此以前にやありけん。今の長森藤吉郎氏邸の舊地主舊鍋島藩士伊太利國在勤成富清風氏が。若樹を老樹より一二尺社殿の方に植られて。宛んど老樹のあとつぎの如く見受けられしが。數年を經て枯凋に屬しけり。（木の姿花の樣子一派卓出のやうにてもありし）既にして右枯凋の前に方りて三種を移されしなりけり。

此頃里俗にもいふなる寶泉寺（氷川神社の隣地）にも金王櫻あり。（編者云風土記稿寶泉寺の條に。金王櫻、金王八幡社の木と同木なり。是も古木は朽て萠蘖數株となれりとあり）これが實物なりと。其の後枯凋せり（予遂に此木を見にゆかざりし）或はいふ三種中の若樹が金王櫻なりと。扨金王櫻の老樹は慥かなる枝を存せしが。幹軀漸次朽損せしを。さすがの名木と崇るまに〳〵。年々の如く垣をも新にしつゝあるものから。其幹軀も枝の西山の姿を示すにあれど。今より約十年以前根より若木をふき出し。又も荐りに若木をふき出しけるにこそありけれ。之を新に植られたると思ふ人もあらん。なれど決して然らず。さて此老樹はしも其西山にかたむかんとする枝毎に八重と一重を混じ交へつゝ咲くなる。されば實際の金王櫻なる事を容易に疑ふべき事にもあらずなも。

又云かな文の碑は當社の概歴を元治年間に鈴木翁の筆のもとになれるを。此鈴木翁非常の當社崇敬者なれば。若木を後繼者と擬せられしにや。

前にもいへる如くあはれ。老樹凋落して若木ぞ名木と徐ろに思ひ居りしに。明治二十五年頃より老樹の根よりめばえ出て。今は實際の金王櫻の若木を保有しつゝ有るものを。此記事にて金王櫻の系統は稍々明かになりぬ。但櫻はあまりに老壽を保つ樹にもあらざれば。少くも三四代は經たるならむ。其の後繼者は何れ根より萠出せし若木とか。或は其の實生のものとか。必らず原種に緣由あるものなるべし。そは今に至りて確定するを得ざれど。現在の若木は老根より更に出しとすれば。洵に芽出度ことどもなり。

名木も何代目ぞやかむて鳥　一　荼

鳴呼鎭座の松

澁谷町鄕社八幡神社に詣てたる人は。其境内に於て一老松の幾百年の霜雪を凌きて亭々群を抜きて聳るを見出てとなるべし。これ所謂鎭座松にして。東照公時代に靑山常陸介忠成侯が投せし扇子が枝上に懸りたるによりて名けられたりと傳ふる所のものなり。當時既に鬱然たる名樹なりしならむ。爾來また三百年の春秋を經て愈々神さびたる神木と仰がるゝを。今や不幸にして漸次枯槁してまた餘命を保つべからざるに至れり。

老松其直立十一間周圍九尺三寸。一部は軀幹高く直立し。

上部に至りて縱横に枝葉の繁りたるは。恰も人の傘を擴けたるに似たり。今や此無類なる來歷と形狀とを有する神木は伐採されざるべからざる運命に遭ひぬ。惜みて尙ほ餘りあり。こゝに之を記して後代に傳ふることゝなしぬ。

鎭座の松既に其影をとゞめずなりぬ。されど境内には新に櫻樹數多植られたるあり。亦以て神殿の景觀を補ふに足らん歟。

右は社司比留間氏の記する所なり。靑山忠成何が爲めに扇を投せしや。又扇の懸りしとて何が故に鎭座の松とはいひしぞ。其の說明なければ了解する能はず。

○澁谷氏の舊蹟に就て

同書に澁谷金王丸城跡と標記して云。江戸砂子に同所八幡の西にあり。馬場的場築地の形今にあり。古井もありと載す。今日尋みるに。それと覺しき所もなし。八幡宮の社のうしろ今墓所ある地のあたりもしやそのあとにもやと思はる。この土地に住るものも。なへてかたはしをもしらず。いとまあらば猶重て尋ぬべし。

澁谷六郎基家は金王丸が祖なれば。基家が住し所を傳へて金王丸こゝに住しなるべし。然らば金王丸が城跡とて沾涼が別に擧しは一事兩樣にや。況や澁谷の六郎は相模の澁谷に住てこゝに住しにはあらぬをや。江戸砂子載する所信用すべからず。

澁谷六郎基家系圖　大系圖四

葛原親王孫　始賜平姓

高望王之子

- ●良兼 鎭守府將軍 上總介 — 公雅 — 致賴 平太夫 — 致經 左衞門尉
  - 致房 加茂二郎 — 忠通 鎭守府將軍
    - 忠賴 陸奥守
    - 忠常 上總介 號千葉
      - 秩父將恆 一作常 — 武基 秩父別當 依謀反被流 — 武綱 秩父十郎 伊豫守 頼義合戰之時給先陣
        - 重綱
        - 澁谷基家 六郎 — 澁谷重家 河島平三太夫 — 重國 庄司 — 高家 二郎

源平盛衰記二十卷大庭が黨に相模國住人澁谷庄司重國とあり。同書十九佐々木取馬條略佐々木源三秀義が子略太郎定綱は下野宇都宮にあり。次郎經高は相模の波多野にあり。三郎盛綱は同國澁野にあり云々。これに由て之をみれば六郎基家相模國澁野に住しより在名を以て家に名け。子孫澁谷と名乘。武藏の澁谷に住しにはあらず。たま〳〵地名同じきを以て武藏の澁谷を以て基家の故跡なりと思ひあやまりしなり。同書中に澁谷澁野兩樣に書たれど。大系圖にも澁谷と書たれば。澁谷と書を本なるべき。武藏の七黨の私ノ黨を篠黨と同書に書たる所もあれば。澁野も其類にてたゞ字音を借たるのみにて。相模の澁谷は必澁野と書にはあらじ。さて武藏の澁谷をもて基家の住所とせしより。こゝは築地のあとなり。かしては馬場なりなど。あらぬことまで思ひ迎へて後人をあやまるに至る。おのれさきに其地にあそびし時。地勢をみて基家の古跡にあらざるをうたがふ。盛衰記に徵して果して其しかるをしる。庚辰季夏靖重識。

編者は澁谷に於ける澁谷氏の事蹟に就き。大に考査する所あらむとす。何となれば其の事蹟明確ならざればなり。但日子足らざるを以て遺憾ながら之を他日に讓ることゝせり。若し既に調査し給へる諸君あらば。幸に寄稿あらんことを請ふ。乃ち喜びて本書に登載すべし。

●羽澤の史跡

頃者高瀨羽皐翁其の編輯せられし「刀劍と歷史」を寄贈せられたり。第五號に「羽澤の史跡」と題する一項あり其の實況を述べられたれば。左に之を抄錄す。

吾等が此羽澤に移り來る頃は。堀田相模守の下屋敷跡（拜御料地）に赤十字社の病院が建築せられたると。其地の道路を隔てゝ黑田子爵（淸綱君）が住たるのみにて。吾住る地は一面の櫪木林其間は千萱高かや彌茂りにしげりて。人の丈を沒する許りなりし。東の岡に槻の老樹が十本餘り立ならび。西の方は斜めに下りて淸水の湧出る處。谷には細き流れあり。向ふの岡まで田に成りて居り。人家といふは門前の邊りに。萱ぶきの家椎木茶屋といふが一軒と。人力車の丁場が一軒あるのみ。四方一帶の山村郊野。野趣尤も深く幽棲には極て適せり。然るに漸次開け來りて吾が住む一區域の外は。瓦屋板屋ヒシ〳〵と建並び。車馬の音かまびすしく。市店も出來飮食店も開かれ。全然光景一變せり。是れ僅に十年間の事なり。

されど吾住む天賜苑のみは。山村郊野の風光依然として。昔ながらの林泉あり溪流あり。松林深く竹叢最も密。水雞の聲、黃鳥のしらべ以て誇りと爲すに足る。さて周圍の史蹟はいかにといふに。

吾が草廬の西の谷を隔てゝ長松古檜の高く聳たる岡あり。これ松崎慊堂の居住地にて。石經山房と稱したる處。藤田東湖、林鶴梁などが折々來りて國事を談じたる舊蹟なるが四五年前まで慊堂の書齋が殘り居りし。この松崎は太田備後守（老中）の顧問にて。有爲なる學者なりき。又是より二丁許りに服部南郭の別莊あり。白眞墅と稱し南郭焦にあり。獨山人の「一話一言」にも詳く載す。今も子孫所有して土藏存す。內に南郭の遺物あり。

吾前の病院の境內には堀田家にて建てし聖廟の跡あり。堀田家は文學を奬勵したる家なり。之を先年まで狐屋敷と唱へ狐が多く居たり。

戯作書　戀川春町墓　倉橋氏名格稱壽平能畫鳥山石燕門人寛政元巳酉年七月七日歿年四十六法號寂靜院廓譽滿水居士　内藤新宿　成覺寺

俳諧　倉橋蘆仲墓　名勝正稱思藏寛政元巳酉年九月九日歿　同　同寺

書　松本董齋墓　名盛義字直方稱正助號小龔又中岳明治三庚午年四月廿五日歿　同　大宗寺

狂歌　二世巴扇堂常持墓　連氏名長臂通稱彦右衛門號鸞毛亭又筆常持文政十一戊子年二月十八日歿年六十法名清光院連山淨休居士　同　西方寺

諸侯　松平容保墓　舊會津藩主也明治二十六癸巳年十二月三日卒去年五十九　同　正受院

經濟　川村瑞見墓　稱平太夫仕幕府元祿十二甲卯年九月六日歿年八十二法號雜明院玄鑑自休居士　同　天龍寺

博學　塚本寧海墓　諱明毅字桓甫稱金太郎江戸人明治十八乙酉年二月五日歿年五十三法號文恪院殿簡譽寧樂居士　同　成覺寺

儒　久保盅齋墓　名冲字泰亨稱二郎右衛門讃岐高松人仕一橋侯天保五甲午年十月十九日歿年五十六私謚曰正敬　千駄ヶ谷瑞圓寺

幕吏　木村芥舟墓　名毅稱又助仕幕府任攝津守爲軍艦奉行明治三十四辛丑年十二月九日卒　同　寺

僧　增譽法印墓　當寺住職也俗姓眞田氏精通軍術寶永四丁亥年七月二日寂　同　聖輪寺

俠客　藥鑵平五郎墓　藤田氏山手五番組ふ組消火夫頭取以仁俠有名嘉永二己酉年五月十九日歿年七十三法號以心院得入日道信士　千駄ヶ谷村原宿　妙圓寺

藩醫　小關三英墓　名好義號篤齋出羽庄内人仕岸和田侯天保十己亥年五月廿三日歿年五十三法名黃雲院俊峯三英居士　同　龍岩寺

俳諧　芭蕉堂以長墓　通稱有馬菊右衛門明治三庚午年十一月廿一日歿年六十四　同　代々木清岸寺

和歌　日夏繁高墓　享保十六亥年五月九日歿年六十二

國學　新井剛齋墓　名彰字子常稱顯藏仙臺人天保五甲午年六月ノ日歿年四十九　大坪流馬術家稱主殿（世人誤稱長坦平九郎墓）　懷ヶ谷莊　殿寺

馬術　齋藤定易墓　名直大字櫻宇一字浩雪別號香邨紀州侯醫官也嘉永六癸丑年八月廿六日歿年五十四法號浩齋院釋浩然看邨居士　下渕谷村寶　泉寺

木草畫　坂本浩然墓　筑前福岡城主也叙從四位下任筑前守元和九癸亥年二月四日卒去年五十六　渕谷村元宮增妙　祐寺

諸侯　黑田長政墓　名正紹稱道之號東井仕東照公寛永八辛未年十二月十日卒年八十三　渕谷鮮　雲寺

醫　曲眞瀨玄朔墓　名鶴昌民部少輔雅髮號玄懷又安室仕德川二代將軍寛永十六己卯年四月廿三日卒年三十二　同　寺

同　今大路道三墓　延壽院道三門人仕德川氏叙法師號啓通院正德二乙酉年四月二十日卒年五十九法名陶田　同　寺

同　岡本玄治墓　玄治子也仕德川氏叙法眼號啓通院貞享元年甲子九月廿二日歿年六十入法名裝潢　同　寺

同　同　玄琳墓　通稱道三叙從五位下任典藥頭稱兵部大輔貞享三丙寅年五月廿三日卒年五十　同　寺

同　今大路親俊墓　通稱道三任典藥頭稱式部大輔元文二丁巳年閏十一月廿九日歿年六十三　同　寺

同　同　親顯墓　通稱道三任典藥頭稱民部大輔寶暦九己卯年六月十四日歿年五十　同　寺

同　同　元勳墓　筑前久留米城主也文化九壬申ゝ正月廿三日卒年六十七法號大盛院殿寂譽道　同　寺

諸侯　有馬賴貴墓　豐前中津藩十萬修英學我邦文化先導者也明治三十八乙巳年四月十六日歿年六十二　同　寺

教育　小幡篤次郎墓　名賴矩稱傳藏明治二十四辛卯年一月十二日歿年七十六　同　寺

儒　妻木棲碧墓　世人稱松前屋騷動其名高正德五乙未年三月廿四日歿　同　寺

俠客　松前屋五郎兵衛墓　文久二壬戌年閏八月　歿　同寺中景德院

音曲　常盤津豐後椽墓

音曲　初代　同　文字太夫墓　安永十辛丑年二月朔日歿年七十三

幕吏　堀田正敦墓　仕幕府、若年寄叙従一位下上野守水月天保三壬辰年六月十六日卒年七十八法名報國院水月無染著書有數多

彫工　後藤貞行墓　以馬形彫刻有名　明治三十六癸卯年八月三十一日歿

俳諧　四谷庵月良墓　津江氏稱林減　明治九丙子年六月廿四日歿

同　二世太白堂桃隣墓　瀬尾氏又號桃翁　安永五丙申年十二月十九日歿年八十一

同　平山梅人墓　號探茶庵　享和元辛酉年正月十四日歿

畫　月岡芳年墓　吉岡氏稱米次郎或大蘇　明治二十五壬辰年六月九日歿年五十四法號大蘇院釋芳年居士

和歌　鈴木重嶺墓　號翠園村山素行門人仕幕府爲佐渡奉行　明治三十一戊戌年十一月廿六日卒年八十五

諸侯　德川義宜墓　尾張名古屋城主名繼或叙任從三位左近衛權中將　明治九丙子年十一月某日葬去

同　同　慶勝墓　稱尾張名古屋城主也叙從一位勳二等能文武兩道　明治十六癸未年十月某日葬去

儒　高原林八墓　名濤字子行　享和二壬戌年八月十二日歿

●東多摩郡内有名の墳墓

算術　小川秀藏墓　名算學城西中野村人　文化三丙寅年四月廿八日歿

詩　川名林助墓　名孟緯字仲裕稱林助號南條山人房州人　安永二癸巳年九月九日歿年四十二法名珠林道練居士

書　筒井政憲墓　仕幕府任伊賀守號鑾溪能書　安政六己未年六月八日卒年八十二法號政憲院殿仁惠誠功日學大居士

四十二

同　同　中寺香林院

同　大久保專念寺

同　法寺

同　專寺

同　寺

同　寺

同　金寺

同　西光寺

同　寺

同　高田馬場下　寶寺

中野村　寶寺

大塚信査調

業務種目

銅版石版彫刻印刷◎木版
活版電氣版亞鉛版寫眞版
其他各種◎意匠考案◎各商
店營業案内編纂

美術繪畫○地圖○商標○名刺○株券
○小切手○印紙○免狀○褒狀類其他
印刷ニ關スルモノ一切○各種製本印
刷裝釘等

地圖繪畫書籍委托販賣

東京神田區通新石町三番地　東陽堂（電話本局九七〇）（振替口座東京一一九〇六番）

東京市神田區駿河臺袋町十一番地　東陽堂印刷所（電話本局四八七）

日本名所圖會

毎月一回二十日發行

定價表

冊數	定價	郵稅	合計
一冊	金十五錢	金一錢	金十六錢
五冊	金七十一錢	金五錢	金七十六錢
十冊	金一円三十五錢	金十錢	金一円四十五錢
二十冊	金二円五十五錢	金二十錢	金二円七十五錢

注意◎本誌は前金御注文の外送本せず◎區郡村名は郵便局へ振込の事◎郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る

明治四十四年七月十五日印刷納本
明治四十四年七月二十日發行

著作權所有

發行兼印刷人　東京市神田區駿河臺袋町十一番地　吾妻健三郎

編輯人　同市下谷區御徒町一丁目五十五番地　田中市之助

東京市神田區通新石町三番地（電話本局九七〇番）　發行所　東陽堂（振替貯金口座東京壹壹九〇六番）

日本名所圖會賣捌所

京橋區尾張町	東海堂	本郷區元富士町	盛春堂
神田區表神保町	東京堂	神田區神保町	上田屋書店
日本橋區吳服町	合資會社北隆館	京橋區銀座四丁目	春祥堂
京橋區鐘屋町	良明堂	越後國新潟市	北光社
日本橋區住吉町	至誠堂	高知市種崎町	標本調製所 吉村寅太郎
大阪東橋田町	山陽堂	名古屋〃	淺見文昌堂
京都寺町二條南	盛文館	信濃國上諏訪町	宮坂書店
京都佛光寺通東入	合名會社芸艸堂	薩兒島市仲町	吉田幸兵衛
	三共社	下總國水海道	新井堂

山本松谷、富田秋香、岡田梅村先生畫

日本名所風俗畫

（美麗石版彩色摺）

英文圖解附全三冊　定價金一圓五十錢　郵稅金四錢

岡田松生先生編○山本松谷先生畫

日本小供遊び

英文圖解附全一冊　定價金八十錢　郵稅金四錢

岡田松生先生編○月耕、松谷、秀木畫伯畫

日本十二ヶ月畫帖

（美麗石版彩色摺）

英文圖解附全一帖　定價金一圓　郵稅金四錢

福井江亭先生筆（木版彩色摺）

江亭花鳥畫譜

全一冊　定價金三十五錢　郵稅金二錢

山本松谷筆（木版彩色摺）

松谷漫畫

第一編一冊　定價金四十五錢　郵稅金四錢

山本松谷先生筆（木版彩色摺）

松谷花鳥畫譜

第一編　定價金七十錢　郵稅金四錢

郵岡良彌著

日本地理志料

全五帙　一帙三冊入　定價金十二圓　郵稅金十五錢

本邦地理ノ書タル汗牛充棟數フルニ遑アラズト雖ニ多クハ封建ノ時世ニ成リタルヲ以テ其記事ノ大抵一國一郡ニ止マリテ五畿八道ヲ總括セル者ナク爲メニ王政施治ノ全斑ヲ通觀スルコト能ハズ學者常ニ之ヲ遺憾トス郁岡先生此ニ慨アリ倭名抄國郡都里ノ二篇ヲ抽テ詳細ニコレガ箋釋ヲ施シ古今地理ノ沿革ヲ證明セラレ延テ北海道、沖繩、臺灣、韓國ニ及ブ古事記、舊事紀、六國史、以下律令格式ハ勿論戰誌野乘、祠傳寺記、系譜墓銘ノ屬ニ至ルマデ事苟モ地理ニ涉レル者ハ必ラズ之ヲ網羅シ力ヲ用ル事コヽニ二十餘年三タビ稿ヲ易テ始テ成レリ上ハ神代ヨリ下ハ今日ニ至ルマデ無慮三千餘年間國郡ノ沿革鄉里ノ變遷戶籍田制ノ推移城砦驛牧ノ存亡陵墓祠寺等ノ興廢一目瞭然トシテ恰モ掌上ノ紋ヲ見ルガ如シ

歌舞伎年代記

全十冊　定價金三圓五十錢　郵稅金十二錢

談州樓焉馬撰　勝川春章
同　春亭　同　春好　畫

本書ハ寛永元年甲子ヨリ文化七年庚辛ニ至ル百八十七年間ニ涉リ江戶芝居ノ起源ハ勿論狂言名題ノ大概役者ノ終始名人上手ノ技藝並ニ每年ノ興行、せりふ、され歌、月旦評等ニ至ルマテ悉ク之ヲ蒐集シ故人知因ナル俳優ノ談話ヲモ記載シ且ツ勝川氏ノ筆ニナル畫圖ヲバ每頁ニ挿入シタルヲ以テ其趣味肆々トシテ盡クル期ナシ

東京神田須田町

宋元明清諸名家遺墨○猪瀨東寧先生編

名蹟撮要

畫仙紙判大本（甲、乙、精巧木版摺）（丙、丁、）全二冊帙入　定價金三圓　郵稅金十二錢

谷文晁先生畫

名山圖會

（石版摺）全三冊　定價金一圓五十錢　郵稅金十錢

谷文晁先生、富山及樂山ト號ス、幼ヨリ山水ヲ好ミ四方ヲ漫遊シ名山大河ニ遇フ每ニ必ズ圖シテ而シテ畫軸ニ收メタリ名山圖會卽チ是ナリ本書ハ原版ヲ飜刻シタルモノニシテ意ハ到ル所筆ノ遠スル所印刷鮮明也畫學ノ龜鑑カニ一本ヲ購ヒ以テ粉本ト爲シ給ヘ

縮寫

東海道名所圖會

全八冊　定價金八十五錢　郵稅金八錢

方今名所舊蹟ヲ探尋シテ其ノ由來ヲ詳カニセントスルモノ頻々輩出シ、此レガ長書ヲ求ムルコト、猶大星ノ雲霓ヲ望ムガ如シ、往時名所圖會類ノ、刊行セラレタルモノ將多アリト雖モ、其原板ヲ失ヒ卷帙散亂シテ得ルニ容易ナラズ、爾來星霜ヲ經ルニ隨ヒ、遂ニ泯滅スルナキヲ保セズ、因テ弊堂ハ寫眞術ヲ應用シテ、更ニ轉寫・唯其形ヲ縮小スルノミニテ、其ノ眞ヲ全フスレバ實ニ寸珍ノ美本トリト云フベシ

圓山應擧畫○寺崎廣業先生摹

難福圖卷物

（精巧石版彩色摺）福一卷　難二三卷　全三卷　函定價金五圓　郵稅小包四百匁迄

此卷物ハ有名ナル三井寺ニ珍寶トシテ秘藏セラル、處ノ故圓山應擧ガ多年丹精ヲ凝シテ描キタル七難七福ノ圖ヲ弊堂獨得ノ妙技ヲ以テ石版印刷ニ附シタルモノニシテ他ニ比類ナキ至珍ノ繪卷物ナリ

須原長三君著

扶桑書畫款印集覽

天、地、玄、黃　全四冊　定價金一圓十五錢　郵稅金六錢

本書ハ上千載ノ古昔ヨリ下現世ニ至ル儒者、詩人、書家、歌人、隱逸、俳人、古畫、浮世繪、四條、文人畫等有名諸大家五百有餘名各部門ヲ別チテ其ノ落款及印鑑並ニ手跡ヲ載セ一々小傳ヲ附シタルモノニテ斯道ニ念アルモノ一本ヲ備フレバ如何ナル古書畫ヲモ容易ニ鑑別スルヲ得ベシ

發行所　東京新橋通　東陽堂
神田石町
振替口座一九七〇
電話本番一一九六〇

渡邊華山翁遺墨

◎一掃百態

（木版彩色摺）

全一冊　定價金一圓　郵税金六錢

本書ハ華山翁ガ文墨ノ餘瀝ニ成レル正慶元亨ノ頃ヨリ翁ガ當時ニ至ル迄ノ百般ノ風俗ヲ細大漏サズ描寫セシモノ氣韻自ラ高邁健筆一掃ノ間百態ノ人事歷々掌ヲ指スガ如シ

小原重哉先生筆述定

王香堂畫譚

價金六拾錢　郵税六錢

全二冊　乾坤錢

關山忠武君編　場下重民君校定

浮世繪編年史

價金七十五錢　郵税六錢

全一冊

清本飜刻

◎佩文齋耕織圖

（精巧石版伯紙摺最大形）

全一冊　定價金一圓五十錢　郵税金八錢

此書ハ清ノ康熙三十五年欽定セシモノニシテ耕耘ノ部二十三圖機織ノ部二十三圖一康熙帝ノ御製ヲ挿ム製本古雅ニシテ圖ハ弊堂特技精巧石版繪ナリ苟モ耕織ニ志アルモノハ須臾モ缺クベカラザル珍本ナリ

高島得三先生著

◎歐洲山水奇勝

（精巧木版摺）

（佛、伊、蘇）　全一冊　定價金一圓　郵税金八錢

著者ハ歐洲ニ遊ビ山河ヲ跋渉シ遍ク彼地ノ奇勝ヲ探リ描寫セシモノ一百餘圖ニ及ベ爰ニ先ツ佛、伊、蘇ノ三國ニ就キ其ノ尤モ絶奇ナル者ヲ擇ミテ出版ス凡ソ歐洲ノ勝地ヲ探ラムニハ數年間ノ日子ト數萬ノ旅費トヲ消歷セザルベカラズ然ルニ今座シテ之ヲ机案ノ上ニ觀ルヲ得ルハ蓋シ君ノ賜ナリ

尾形月耕先生筆

◎月耕畫鑑

（コロタイプ版）

第一卷既刊　一冊　定價金一圓　郵税金六錢

本編ハ元祿美人姉妹ノ大版圖ヲ首メ源氏蓬生、石清水、伊勢、春日三祠ノ高尚ナル琴碁書畫壯丁ノ宴、熊野、名古曾關等ノ優美ナル花見、魚河岸、山王祭等江戸ノ粹ヲ發揮シタル秀逸ナルモノ數十圖ヲ挿入シタリ

白龍山人菅原元道先生

◎日本勝景

全一冊

定價金八十錢　郵税金六錢

（精巧木版摺）

渡邊知三郎君編○故富岡永洗畫伯筆

華山忠孝血淚譚

全一冊　定價金五十五錢　郵税金四錢

本書ハ華山渡邊登先生誕生以來ノ事蹟ヲ細大漏サズ序ヲ追フテ纂錄ス行文平易兒女ニモ謂ミ易キ小說體ノ詳傳ナリ世ニ先生ノ傳記ヲ錄セシモノ數多アレドモ恐クハ此書ノ右ニ出ヅルモノナカラン

菅原白龍先生書

草書千字文

全一冊　定價金三十錢　郵税金二錢

白龍山人ノ畫ニ巧ミナルハ世人ノ知悉スル所而シテ未ダ其書ニ妙ナルヲ知ルモノ尠シ山人極メテ草書ニ巧ミニシテ其運筆縱橫潑墨ノ妙龍天門ニ跳リ虎鳳闕ニ臥スルノ概アリ此帖ヲ繙カバ必ラズ其眞價ヲ窮知スルヲ得ベシ

生川春明翁著○大槻修二先生校訂

近世女風俗考

全一冊　定價金五十八錢　郵税金六錢

此書ハ古昔ヨリ現時ニ至ル婦女子ノ髮ノ結振、櫛、笄、簪鬢ノ事ヨリ鏡、被衣、帽子、振袖、帶、日傘、足袋等ニ至ルマデ苟モ婦人ノ風俗ニ關スル一切ノ事實ヲ最モ精密確實ナル考證ニ據リテ編述シタルモノナリ

菊地容齋先生著

考證前賢故實

全二冊　特價金二圓六十錢　郵税金十五錢

本書ハ嘗テ天覽ヲ辱フシタルモノニシテ當時日本畫士ノ名稱ヲ賜リタル容齋菊地先生ノ著述ナリ、圖中ノ服飾器具等ハ悉ク古器古圖ニ徵シ一モ杜選ナキヲ證明セムガ爲メニ、先生畢生ノ苦心ヲ以テ其ノ考證ヲ蒐集セラレタルモ生前刊行スルニ至ラズ久シク菊地家ノ秘物トナリ深ク篋底ニ藏メアリシヲ、今回令孫菊地武丸君ト相謀リ之ヲ鮮明ナル寫眞石版ニ付シテ發兌セリ傳記ニハ一々各種引用書注ノ意アリ更ニ旁訓反點ヲ加ヘ且ツ訂正ヲ爲シ第十一卷ニ至リ、考證記事ト故實圖一百餘ヲ載セ添ルニ先生ノ自書肖像ト本書原稿ノ故紙ヲ以テ自カラ造ラレタル壽老人像ノ撮影トヲ以テシ其ノ碑文ト由來ヲ詳記シ大槻如電、今泉雄作、黑川眞道、關保之助、松本楓湖諸ノ大家ノ校訂ヲ經タル稀代ノ珍書ナレバ歷史家、考古家ハ勿論美術家ハ必ズ几上ニ一本ヲ備ヘザルベカラズ

特別叢書　繪畫號

文部省美術展覽會號

全一部正價金六十五錢　郵税金二錢

第四回展覽會出品ノ大作六十餘圖ヲ鮮明ナルコロタイプ版トナシ且ツ細評ヲ加ヘタルモノ

發行所　東京新橋通神田石町　東陽堂　振替口座一一九〇六〇番　電話本局九七〇〇番